

一 規定の外増造の儀ハ堅禁候條於其筋々可遂吟味事
 但増造の儀其筋を以願出候得ハ御糺の上其筋より
 可及沙汰事
 一 凶年より分割を以減造可致事
 一 造酒百石ハ付金貳拾兩宛上納被仰付候事
 一 前年心得違よて規定の外増造致シ鑑札取揚メ和成候者
 共悔悟の上願出候ハ百石ハ付金五拾兩宛上納被差免
 候事

右の通被仰出候間心得違無之様嚴重メ可相守事
 札料和添上納の事
 但共支配所よて酒造米高并名前前書共委細帳面メ認め鑑
 百石ハ付金貳拾兩宛取立候上ハ上納可有之事
 右 雛形メ準ヒ夫々其支配所よて割印燒印共取極鑑札和渡
 ○ 堅曲尺五寸横三寸五分 ○ 厚さ仕上げ五分
 表
 何某
 割印
 酒造米 ○ 何目石
 但元米掛米共
 慶曆四年辰
 裏
 燒印
 商法會所
 商法
 司印

〔同〕官〕御布告 同 月

一 府藩縣各印鑑を製すべき事

但某府印某藩印某縣印と刻すべし

一 各府各藩各縣の所部は屬する社家寺院等以來其向よて

可爲支配事

但府藩縣よて難決事件の其支配所より印鑑を遣し辨

事傳達所へ可爲差出事

伊勢兩宮并大社勅祭神社の外は以後神祇官よて直よ

社家の支配不致事

〔同〕官〕御布告 同 月

過日供連の儀相達候處唐門内狭少よ付多人數入込候てり
自然不取締の儀も出來可致よ付以後左の通相心得可申
候様御沙汰候事

唐門内供連左の通

宮堂上諸侯

侍二人 下部二人

雨天の節ハ傘持一人

平唐門内

侍二人 草履取一人

但供待の分ハ侍二人に限る

- 一 供待の者廻廊よて休息致問敷事
- 一 唐御門迄此頃御布告の通侍分六人下部三人召連同所腰掛へ扣置可申候事
- 一 馬合羽籠其外下供の分九門外腰掛近々出来の上同上へ扣居可申候事
- 一 兼て御布告相成有之候通唐門内供溜の煙草相用候儀御制禁尤諸事嚴重可有之候處近来自然相弛み無作法の儀有之哉又相聞候間以後右様の儀無之様相心得可申事
- 一 此度供待爲取締監察の者時々爲見廻候間相心得可申事
- 一 從者の向唐門内よて辨當遣問敷事

一 驛遞司御布告 五月

定

- 一 宮堂上家并地下官人等以來自分印鑑を相止め御用發足の節一々當役所へ相届人馬帳御印鑑を請自分先觸よて可爲致通行候事
- 一 以來征討の將軍京都發向の節是又當御役所の御印鑑を被請候筈他國滯陣中幕下の士諸方へ往來の節其將軍府の印鑑を人馬帳又抑持參可爲致通行候事
- 一 諸向官吏并用達町人等御用又付出候節太政官始め局々共御用の次第柄添簡を以人馬帳を當御役所へ相達御

印鑑を請當人先觸を以通行の事

一諸國府縣並諸侯其餘大地の神社佛寺等夫々自分印鑑相
用候分ハ印鑑御役所へ相届驛々へも差出置家來往來の
節右印鑑人馬帳又押持參可爲致通行の事

但京都府の分ハ當御役所御印鑑又て通行の事

一諸侯御定人馬遣高御制限被爲立候迄先是迄の振合を以
諸街道可爲致通行候事

一京都神社佛地大地の分ハ御用通行の節直ハ御役所へ相
届け御印鑑を請小地の分ハ其支配の添翰を以て御役所
へ可願出事

一諸國小地の神官僧徒修驗普化僧檢校百姓町人等御用或
ハ領主用又て通行の節ハ夫々支配へ願出支配印鑑を請
通行の事

一京都持出入足の儀是迄相對雇入又付御用通行の節ハ宮
堂上家々領有之面々ハ自分領民用ハ被來候處今般宿々
へ助郷組込候又付てハ以來傳馬所又人足を爲差置御
用の節當御役所より印鑑差出候分ハ定賃錢又て爲持出
候傳馬所附屬の助郷洛外最寄又於て組立候事

一近來物價騰貴驛郷一般及疲弊又付諸街道共人馬賃錢當
辰年五月より來己年五月迄の中一箇年の間在來割増の

分相除前々定有之候元賃錢の上へ六倍五割増被仰出候事

一諸藩國產藏物其餘町人請負の用荷物當御役所へ屈濟の上元賃錢の上へ八倍五割増よて繼立爲致候事

但荷物の内町人賣物を用物よ仕立或ハ竊よ取交荷造を變往來候向も有之怪敷荷物等見受候ハ其宿方よ於て切解き吟味爲致候筈よ候事

右の通被仰出候事

〔同 官〕御布告 五月

今般漢學所よ於て假よ寄宿寮被爲建候間三十歳以下の宮

公卿入寮致度輩ハ漢學所へ可願出候事

但入寮日限の儀ハ漢學所より差圖可有之候諸侯以下の輩ハ當時寄宿寮狭少よ付追て御取建可被仰出候事

〔驛遞司〕御布告 同 月

一近來物價騰貴の上五畿七道追々往來繁多よ相成宿驛助郷共次第よ困難可及離散の體難捨置依て左の通被仰出

一是迄宿驛助郷の村々入雜り平等あらざるよ付今般相改宿驛最寄次第御領を始宮堂上方領社寺領よ至る迄凡東

海道よ七萬石中山道よ三萬五千石其餘脇街道よ一萬石程高四分勤の見積を以先一箇年の間一圓助郷よ組込候

事

但下情熟察の上逕て永世の良法御確定の事
 一宿驛助郷常々不相合其問の雜費不少且定賃錢にて人
 馬調ひ不申宿驛にて多分足し錢相掛り候も付仍て以來
 の宿驛助郷を一體もあして其費を省き人馬の別も應
 じて出させ足し錢の石高も應じて出させ候事
 一此度格別の御趣意も依り無賃人馬木錢米代の休泊等一
 切不相成并諸家御定人馬遣高御制の限も遣々可被仰出
 候間宿驛も於ても其意を體し雇賃錢宿料等時の相場も
 應じ可成丈相減し區々不相成様宿々家毎も張紙も認置

可申萬一過分の取方見掛取等の儀有之候の急度其咎
 可申付事

〔太政官〕御布告 五月

今般貨幣定價御取調の上丁銀豆板銀の儀通用停止被仰出
 候間是迄銀名を以貸借有之候向に其引取致し候節の年月
 日の相場もよりて金銭仕切も相改可申候
 舊來の丁銀豆板銀共所持の者も近日御改製の新金錢を以
 て御買上相成候間追々其筋より會計官貨幣司へ可申出者
 あり

〔同官〕御達 同月

太政官印曲尺二寸五分諸官府藩縣印同二寸二分諸司印同
二寸三等官以上を勅授官とし太政官印を押す四等五等二
官を奏授官とし行政官印を押す六等官以下を判授官とし
其所屬官印を押す

〔同 官〕御達 五月

龜井 隱岐守

雲州大社の儀ハ格別御尊崇も可被爲在候處爾來其儀も不
被爲在御遺憾も被思召候今般其方歸邑も付彼社の隣國の
事も候間其古典を始め夫々取調可申様被仰出候事

〔同 官〕

同 月

一從來諸藩留守居役を以公務取扱候儀不相當も付向後公
務人の職を設け貢士是を勤め都て朝廷も關係致し候事
件可爲取扱事

但公務人の國論も可代もの勿論の儀も候へ共朝廷も
ての公務人即貢士もて其藩もての可代國論職分たる
べし其心得を以人才任用可届出事

一公務人藩々も於て新も可代國論職分の者も命も差出候
の其藩是迄貢士の爲引取可申是迄差出候貢士もて命
も候の其藩もて可代國論職分も任舉可致事
一公務人員數并差替等の儀可爲貢士規則の通事

但定員外の助役を置病氣等の節御用事件傳達等爲致
候儀ハ可爲勝手事

一公務人の始終朝命を奉じ其藩論を振起し萬端の取扱等

并議事の條目各國の持論凡て實着し基き各自固有の見

込相立敢て他の耳目を傷り強て雷同不致様可相心得事

右の通被仰出候ハ朝廷の御趣意諸藩の情實脈絡貫通四海

一途の御規模被爲立候御趣意ハ付厚く可相心得事

一同 官御布告 同 月

皇道新又復し國是漸又定り萬機御親裁ハ出で百事將又備

らんとす是時又當て獨備らざるものハ金穀あり右ハ全く

徳川慶喜政權奉還の節國家の用度併て返上勿論たるべき

の處其儀未だ相運ハざる内春來の始末又立到り朝廷無所

入して出す處の御費用不一方又依れり況や頃日征討の兵

士家を棄身を殺し一途報國の折柄万一軍費不給兵食足ざ

る時ハ奮進勦絶の銳氣を挫き皇威是が爲又弛み平治の功

業速又立ざる時ハ億兆の黎庶久しく塗炭の苦を受んと恐

多も日夜御宸憂被爲遊就てハ内外百官の輩ハ申迄も無之

普天率土の臣民聖旨を奉承し朝恩を感戴し畢生の報効此

時ハ在りど覺悟し兵力ある者ハ其力を以てし貨財ある者

ハ其財を以てし上下一般の力を合せ四海平定の功を御扶

植可致事[○]又付銘々一人の私を捨て天下の大事を考へ有餘
不足を補ふの天理[○]又基き各其分[○]又應じ金穀御用相勤め御
奉公筋を遂てこそ即ち兵士の身を殺して朝廷[○]又盡と同一
く下たる者の定分[○]又候間此旨篤と可相心得者也
但御返辨方の儀[○]其筋をより可申談事

〔同 官〕御布告 五月

太政官日誌の中文字の謬を指摘し目安箱へ入置有之其論
定る處精細的當即ち御採用御改[○]又相成尙其人御登用可有
之處名前不相分遺憾の事[○]又候以來御爲と存候儀何事もよ
ら忌諱無く姓名相誌し可建言事

〔太政官〕御布告 六月朔日

今般兩野總房武奥州數箇所[○]又致戰死候輩明二日巳刻御
城内於大廣間招魂祭被仰出候條諸藩隊長司令士登城拜禮
被仰付候事

〔同 官〕御布告 同月三日

一伏見宿是迄助郷無之[○]又付繼立人馬附出し賃錢と唱へ多
分請取候由候得共此度助郷附置候上[○]以來定賃錢もて
繼立申付候事
一守口驛是迄人足而已繼立居候處以來助郷附置候上[○]他
宿同様人馬共繼立申付候事

右の通兩宿へ申渡候旨通行の面々も於ても可被得其意也
一 同 官 御布告 同日

一 此度格別の御趣意も依り無賃人馬木賃米代の休泊等一切不相成候筈も付宿驛も於て其意を體し雇賃錢宿料等時の相場も應じ可成丈相減じ區々も不相成様宿々家毎も張紙も認置可申萬一過當の取方見掛取等の儀有之候に急度其答可申付候事
但是迄相對と申候得り一概も定賃錢へ倍増と相心得居候趣心得違の儀も候以來過分の取方等致し申問敷候事

一 遠見狀拂高張持等の儀勅使始め是迄差出來候分も以來不及其儀候事
一 御用通行の諸家休泊の節宿役人の内心得候者兩三人宿々入口へ罷出居其場所も旅宿名前書顯し張紙も致置夫々差圖可致候事
但旅宿迄附添案内も不及候事
一 御用通行の面々旅宿於て人馬帳爲附記候節宿役人共一々其方へ相越居候て傳馬所手明も相成御用辨難致も付以來の旅宿亭主より傳馬所へ持參附記可申候事
一 是迄幕更通行の節のみ壹人持七八貫目迄爲致用捨諸家

の分ぶんの五貫目ごくわんも限り候條かぎり不條理ふじょうりの至りいたり付以來ついで御用私ごようし用共よう壹人持もち七貫目しちくわんと相定さだめ候事こと

但馬荷うまにの分先ぶん可爲これ是迄までの通事つうじ

一貫目改所くわんめの儀ぎの別段べつだん被立置たておかれ候得共かほ猶また又あやう不正ふせうの儀ぎ吟味ぎんみの

ため宿毎あぐも千木秤ちきばかり御免ごめん相成あひあ候も付如何いかと存候ぞんじ荷物にものの目

方相改かため貫目くわんめも過候あつた分ぶんの御定さだめ賃錢ちんせんの割わりを以もつて可請取うけと候事こと

一京都局きやうと々やぐま并諸國府縣しよこくふけん共被差出とも候御用狀ごようじやう以來い々ちく賃錢ちんせん被

下候さ答こたへ付萬一まんいち無賃むちんの向有むき之候の儀ぎの繼立つぎたて申問ま敷候事敷

一御用物ごようもの無宰領むさいりやうの分ぶんの差所迄さしどころの賃凡積ちんおよそつせりを以もつて相添あ被遣つかは候も

付宿々あぐも於て受取うけと之追おて留とどり宿あぐより過不足くわふそく可申出ま事こと

右の條々みぎのじょうじょう被仰出たがやう候も付向後むか旅人りよの内萬一うち無法むは成儀なり有之候あり

の御料ごりやうの府知事ふちじ縣知事けんちじ私領しりやうの領主りやうしゆへ訴出うた其上うへ及い異儀いぎ候あり

の其所そのところも差留置さしとど早々はや當御役所あつたへ可訴出うた候者也あり

右の通驛みぎのつうえき々やぐまへ觸渡ふれわた候間あひだり領主りやうしゆ并通行あひだりの面々めんめんも於ても可被得あ

其意そのい候者也あり

一官い御達ごたつ 同日どうじつ

來る十六日きたる嘉祥かしょうも付從たう當年ねん嘉祥かしょう米被下まい候間あひだり來る十二日きたる十

三日み己刻みのとくより未刻迄むいとく會計官くわいけいへ申出ま可有之候事あり

但他國た在勤くわいの向むきへ不ふ被下た候事あり

一官い御布告ごふこく 同月七日どうげつしちじつ

一十八百

一十八百

一十八百

一十八百

一十八百

一十八百

一十八百

一十八百

一十八百

一十八百

一十八百

今春朝政御一新の御場合正月十五日御元服の御大禮被爲
 行御仁恤の聖慮と以朝敵を除くの外大赦被仰出候處於關
 東の如何の次第有之候哉于今施行不致候と付今度改めて
 被仰出正月十五日以前の罪人朝敵共余大逆無道を除の外
 一切被差赦候條速に施行可致旨大總督宮御沙汰候事
 〔同 官〕御布告 同月八日
 是迄近江湖水通船御用荷物の分は無賃又の格外低價にて
 通行致來候處以來湖中通船御用荷物並諸藩爲出兵總て相
 對賃を以通行可致様被仰出候事
 〔驛遞司〕御布告 同月九日

今般宿助郷仕方替に相成天領始宮堂上方領何れも組込候
 又付御所並太政官宮堂上方遣人夫二重勤の様も相成手支
 の儀も可有之候間別段洛中傳馬所取建助郷拾三萬石程附
 屬致置御所并太政官堂上方御用人夫等夫より爲繰込候事
 一御所定詰并諸官人夫遣高内侍所内儀御臺所大宮御所等
 平常御用人夫高壹箇年何程御取極の事
 一人夫の儀の懃成者爲差入萬一不束成儀有之候節の傳馬
 所役人より引請急度所置爲致候事
 一人夫遣高も寄輿向等御用筋にて領民も無之ての難相叶
 節の其段前以届有之候へば傳馬所より其領民を以爲繰

入候事

一都合つ又寄傳馬所よりよおいて領民りやうみん繰込方こみかた難出來たがたく候節ハ夫銀ぶぎんを以爲相納候事

右の通被仰出候間御所并諸官年分御遣高何程此分御手當何程宮堂上方遣高何用人積り上年分何程此分心付一人ひとも付何程と申事於各方巨細書記爲見合早々當司へ可差出候事

〔同 司〕御布告 六月十日

宮堂上并諸官共就御用發京の節別紙雛形の通人馬帳ばちやう又相認當司印鑑を可被請候事

別紙

覺

何誰家御内歟

何 某

何 棹

此人足何人掛

但し何誰家來何某と認候給符何枚相添

何 挺

此人足何人

何 掉

一 駕籠

一 長持

此人足何人

但し何誰家來何某と認候繪符何枚相添

一分持

何荷

此人足何人

但し右同斷

一本馬

何匹

箇數何程小付共書記

但右同斷

一輕尻馬

何匹

但右同斷

割印合

人足何人
馬何匹

但賃拂

外宿駕籠何挺臨時用意

但賃拂

右の今般就御用來る何日何地へ發足何海道通行何方迄罷

越候宿々人馬無滯繼立可給候以上

何月何日

誰役場所歟

何宿迄

宿々問屋

年寄中

右の通届有之候事

何月何日

驛遞

御役所

〔太政官〕御布告

同日

近日新聞紙類頻り又刊行人心を惑し候品不少候又付先達
 て不經官許書類刊行被差停候段御沙汰候處猶且陸續上梓
 致候趣又付官許無之分の御吟味の上版木製本共取上げ以
 後相背候節の刊行書林の勿論頭取并賣拂候者迄屹度御
 谷可被仰付候間此旨可相心得候事

〔同 官〕御達

同月十三日

- 一 第一等 金七百兩
- 一 第二等 同六百兩

- 一 第三等 同五百兩
 - 一 第四等 同三百兩
 - 一 第五等 同百五十兩
 - 一 第六等 同五十兩
 - 一 第七等 同三十兩
 - 一 第八等 同二十兩
 - 一 第九等 同十兩
- 右關東平定迄三等以上其半を減じ其以下五等迄の三分の
 一を減じ六等以下都て本額の通相渡候事
- 〔太政官〕御沙汰 同月十五日

山崎主税助

其方領知一萬二千七百四十六石餘有之趣兼て取調差出候
又付先般有高本領安堵被仰付候處從前舊幕府に於て外様
の列よて臣屬に無之候付て此以後萬石以上諸侯列被仰
付候間藩屏の任武備充實專勤王盡忠を竭し御奉公可致條
御沙汰候事

但在京御番入被仰付候間承り合可相勸事

池田彈正

其方領知一萬五百七十三石同上下

山名主水助

其方領知一萬千石同上下

〔同〕官〕御布告 同月十九日

先般楠社御建立に付御手傳致度者に御差許可有之段被仰
出置候處追々願出候者も有之哉又相聞候付て於遠國筋
違之取集方等有之候て不相濟候間神祇官並兵庫縣の兩
處へ申出御手傳の品柄目錄相納置追て右兩所印鑑有之書
付を證とし差出可申旨御沙汰候事

但先達て被仰出候通其最寄の府藩縣へ差出其よりして
神祇官并兵庫縣へ取次候儀も不苦候事

〔同〕官〕御布告 同月廿日

近來大總督宮様御内或ハ官軍杯と稱し中間體の者市中の
商賈并途中往來の人を苦め産業の妨ハ相成候趣相聞不都
合の事ハ候自然右様の儀有之てハ縦令宮の御印有之候共
無用捨直メ召捕刑典を以處置可致候間諸藩末々の者メ到
迄心得違無之様急度可達者也

〔太政官〕御布告 六月廿日

自今開板書物の儀都て草稿を以學校官へ差出改の上彫刻
可致若内々板行致し候者於有之ハ吟味の上屹度御沙汰可
有之候事
右之趣不波様可觸知者也

〔同 官〕御達 同日

是迄用來候諸道印鑑辨事局記と有之候處今度改て辨官事
記と相刻候間爲證印影一紙廻し置候萬一前後致し候てハ
改所メて不都合出來候間來八月朔日より新刻印相用候此
旨爲心得申入候也

〔同 官〕御布告 同月廿二日

方今王化天下メ洽からんと欲す此時メ當り無辜の生民兵
燹の災メ罹り加之洪水暴漲慘毒の至近畿最甚し且東北諸
路賊徒平定メ至らば生民の塗炭一端メわらば皇上深く難
被爲忍救恤阜財の道被爲盡度勅旨痛切メ被仰出候付てハ

至仁の聖意を體認し其民をして安堵せしむるに今日府縣の責あり即今創建の初救荒の典未だ立せど雖一日斯民も益む者即一日此道を講せざんばわらわ況や今日眼前の厄をや故に賑救の急務左に記す

一兵燹の厄洪水の害窮民流離路頭も立者一村も幾人且其破産蕩家等一々細詳に査點し救助其宜を得べし若兵厄水害を被むる地と雖も搜擇其宜を得せ徒に金穀を給すれば却て盡弊を生じ下民の怨望を起し宜しからざる事

一没田の民に全く其租賦を免し其他漲溢の田畑の荒敗の輕重を量り蠲免其宜を得べき事

一堤防橋梁の破壊急々修理可致事

但普請等私利を營まざる廉吏を擇び水理も精き者も任じ人夫等へ其地の窮民も賃して相用べき事

一厄害の等を辨じ救恤の道を立今日の事の事奏可を待たせ

府縣へ專任す宜く可得其道事

同 官 御布告 同日

就來廿六日辰刻伊勢兩宮熱田宮公卿勅使發遣從明後廿四日晚到廿七日御神事候事

辨事御達 同日

納涼の者花火弄び中よの炮聲も紛候程の事も有之御時節

柄不可然の事候以來右様花火堅く被禁候條被仰出候事
右爲御心得申入候也

〔太政官〕御沙汰 六月廿二日

去三月上武野三州の農民蜂起致し不容易形勢を付各藩持
場を定鎮撫可致候様東山道總督より申達則及鎮靜候所此
度改て爲軍監兼當分知縣事大音龍太郎被遣候條上毛一國
御領民改め總て知縣事の指揮たるべく候尤非常の變動有
之節の同人より各藩へ出兵可申達候間此段相心得是迄鎮
撫の村々へも此旨可申達候事

〔同 官〕御布告 同月廿三日

一 仁和寺宮

復節

但寺務の儀仁和寺門跡にて商量

一 梶井宮

復節

但寺務の儀梶井門跡にて商量

一 聖護院宮

復節

但寺務の儀聖護院門跡にて商量并照高院門跡同斷

一 華頂宮

復節

但一宗鎮西山寺務の儀知恩院門跡にて商量

右の通此度改て寺務の儀被仰出候間諸國末寺に至迄都て
指揮を請候様可相心得夫々府藩縣より可相達旨被仰出候

事

〔同 官〕御達 六月廿八日

江戸鎮臺府管轄諸國

駿河 甲斐 伊豆 相摸 武藏 安房 上総 下総

常陸 上野 下野 陸奥 出羽

右十三州鎮臺支配に被仰出候事

〔驛遞司〕御布告 同日

近來驛郷及疲弊候に付諸街道共人馬賃錢當辰五月より來已五月迄元賃錢へ六倍五割増被仰出候に付て、東海道熱田今切渡船賃の儀も追々の割増に不抱元賃錢の上へ三倍

五割増其餘諸街道渡船川越是迄定賃錢申付有之候分都て二倍増を以是又來已五月迄定賃錢被仰出候條此旨相心得渡船御用無滞相勤可申事

右之通諸街道へ被觸置候間爲心得申達候事

〔太政官〕御布告 同月廿九日

大政御一新大義名分を明し、人才御生育被爲在候に付鎮臺府に於て昌平學校御興復被仰出候間、入學相願度者に學校へ可申出候事

〔同 官〕御布告 六月

總て諸港より士商人を論せ、外國船へ乗込候節に必其地

府縣の證書を相受可申證書持參無之分の到着の上其府縣
よて上陸不差許候事

右の通被仰出候間末々至る迄不洩様其最寄よて相觸可
申候事

同 官 御布告 六月

今般金札御製造の天下公行産物融通の御趣向有之諸藩
藩又於ても石高應じ借用被仰付候段過日御沙汰の通
候勿論下々於て取引の正金同様日用普通の貨幣有之
候處往々不心得の者有之御製造の御旨趣又背き徒は金札
を以正金と兩替せしめ姦商共其機に乗じ打賃を相貪り候

哉又相聞不謂事候向後御取糺の上無相違又於ては双方
とも屹度御咎被仰付候條爲心得申達候事

同 官 御布告 同 月

近來頻り路人を暗殺し其所持の品奪取候趣甚以不埒の事
又付屢嚴重の御沙汰被爲及候得共兎角其惡習難去御政
道も不相立次第又付猶亦此度嚴重被仰出家來の其主人
兵隊の其隊長其餘末々至ては其父兄より取締いたし自
然右等の所業有之候節の其最寄より早々取押へ刑法官へ
可申出候萬一藩士兵隊等の中よて不心得の者有之被召捕
又於ては本人の被處刑其主人其隊長等不及申其品

より父兄一家の落度たるを以て屹度御咎をも被仰付候條
不取締無之様厚く可相心得旨被仰出候事

但夜中往來致し候節無提燈不相成旨追々被仰渡有之處
中より不相用者も有之哉又相聞へ以の外の事も候以來
無提燈往來の者有之候の、見付次第可召捕候并市中
於て亂妨致し候者の帶刀の者といへども無用捨召捕萬
一手も餘り候の、討果不苦候事

〔太政官〕御布告 六月

朝鮮國漂流人取扱規則

一 日本人朝鮮國へ漂到候節に於彼國厚く取扱釜山浦草梁

頂の地又和館と稱し宗對馬守家來詰合候場所へ送届漂
着の次第書翰を以て申越其上對州へ迎取漂人の國所最
寄を以長崎府或は大坂府へ送り届其府より其領主へ引
渡可申候事

一 朝鮮人本邦の内所々へ漂着候節に其最寄の府藩縣より
長崎府へ送り届其府に於て漂流の顛末相糺し衣糧給與
船艦修理の上對馬守役人へ引渡し夫より長崎府の浦觸
を以て對州へ爲迎取候事

但浦觸の主意に朝鮮人薪水乏しく風波悪しく候節に
給與して可相通との觸も候事

一 漂人長崎府より對州へ迎取候上對州にて更ニ使者相附
彼國へ可致護送一候事

一 漂人の内死する者あれば棺斂して送り日本の地ニ不葬
候事

一 太政官御達

六月

宗對馬守

今般漂流人規則別紙の通被仰出候間此旨相心得可取扱様
御沙汰候事 (別紙ハ前文御布告を云ふ)

一 同官御沙汰 同月

衣服の制塞喧稱身體裁適宜上下の分を明よし内外の別を

殊ニする所以あり然るニ近世其制一あらざ人其服を異ニ
し上下混淆國體何を以て立つ事を得ん故ニ古今の沿革を
考へ時宜を權り公議を採り一定の御制度被爲立度思召よ
付各見込の儀書取を以て來る廿五日限上言可有之様御沙
汰候事

一 同官御達 同月

府藩縣

一 德川内府宇内の形勢云々 一札

一 德川慶喜天下の形勢不得己云々 一札

今般德川家名相續被仰付秩祿被下置候又付右制札二枚ハ

早々取除可申様被仰出候事

〔驛遞司〕御達 六月

征討の將軍京都發向の節に當御役所御印鑑を被請他國滯
 陣中幕下の士諸方へ往來の節に其將軍府の印鑑を人馬帳
 へ押可被致通行等又付諸藩御用出兵の向も其藩定遣高の
 外過分の人馬入用の節に御用の廉を以て當御役所御印鑑
 を被請可被致通行左も無之多分の人馬觸當候てに於宿々
 大に疑惑を生し繼立方却て不都合の儀も可有之第一前條
 御布告の御趣意も相觸候儀又付尙又爲心得申達候事
 〔同 司〕御布告 同 月

諸藩共諸道通行の節以來新規被仰出候二寸二分の印鑑よ
 て可被致通行尤印鑑七月廿五日限當御役所へ被差出驛々
 へも可被差出置候事

假名公布の寫第一冊終

傍假名訓 公布比寫第二册目次

○ 明治元年戊辰 自七月 至十二月

○ 詔勅

○ 江戸を東京と被稱御詔書 廿七日 廿二丁

○ 奥羽人民悔悟歸服の者御寛典勅諭 七月 廿三丁

○ 明治紀元の御詔書 九月八日 百三丁

○ 東西御同視東京府御臨幸の御詔書 十七日 百五十八丁

○ 氷川神社御親祭武州鎮守と被定 同日 百五十八丁

○ 大石良雄等忠魂御弔祭の宣命 四十一日 百八十六丁

○ 太政官

- 無賃錢諸用狀繼立御制禁 四七月 一丁
- 舊旗下扶助願出の者格式人別調日 二丁
- 駿州四藩所領上地徳川氏へ賜月 二丁
- 諸道飛脚狀賃錢被定 六七月 四丁
- 諸寺院願伺等進達方 七七月 十三丁
- 當春來戰死の靈祭奠式被行日 同 十四丁
- 歸順者の妨おす駿河藩士へ御示諭 十七月 十五丁
- 鎖津買占禁止各地米穀流通豫算 十七二月 十七丁
- 病氣不參在官人辭表差出方 十七四月 十八丁

- 大坂開市地更又開港と改唱 十五月 十九丁
- 宮堂上の家士權威宿驛通行制禁 十七月 十九丁
- 石清水放生會を中秋祭と被改 十九月 二十丁
- 武家地へ商人住居禁止 廿三月 二十丁
- 江戸を東京と被稱御詔文又付御告諭 廿七月 廿一丁
- 議事御改正又付月次對策被廢 廿九月 廿三丁
- 大坂銅會所を鑛山局と被改 七月 廿六丁
- 北野社魚味奉供 七月 廿六丁
- 駿河以東十三州社寺處分 七月 廿六丁
- 護良親王御祭典式被行 七月 廿七丁

- 列藩石炭買入運送取計方月七 廿八丁
- 鎮臺府被廢月七 廿九丁
- 東京在勤職制被定月七 廿九丁
- 東京へ鎮將府被置月七 卅二丁
- 鎮將府管内駿東列藩以下上士等心得月七 卅二丁
- 宮堂上用達と唱權威の所爲禁止月七 卅三丁
- 諸道鎮撫使歸京より付酒饌下賜月七 卅三丁
- 中下大夫上士陸軍局入塾御差許月七 卅四丁
- 風土民俗より民政存付申出方月七 卅五丁
- 故菊地加藤兩氏御旌表祭祀被命月七 卅六丁

- 列藩軍艦蒸氣帆船等當分御借上月七 四十丁
- 兵學校入學規則月七 四十一丁
- 通用停止丁銀豆板銀引替月七 四十四丁
- 諸國税法一兩年舊慣收納月七 四十四丁
- 督典侍三位局と被稱月七 四十六丁
- 薩長土備因尾重職へ勤勞御賞月七 四十七丁
- 江戸民政裁判所を會計局と被改月八日 五十一丁
- 聖護院宮薨去の所鳴物停止不及月八日 五十二丁
- 同上の所御多端の折柄廢朝無之日同 五十二丁
- 親王方以下下馬下乘及昇降規則月八日 五十二丁

○米價騰貴又付本年酒造高減釀八十三日 五十六丁

○來廿七日御即位又付諸向參賀廿八日 七十二丁

○社寺裁判所被廢月八 八十三丁

○品海碓泊徳川氏軍艦無届出航廿五日 八十三丁

○徳川氏へ駿遠三領地下賜四日 九十五丁

○酒造高百石未滿の分増造願日同 九十七丁

○公卿以下在職の地へ家族召寄日同 九十七丁

○浦上村切支丹宗徒取締方九月 百丁

○慶應四年を明治元年と改號九月 百四丁

○自今改元御一世一號又被定八月 百四丁

○本領安堵と偽舊菜地へ九月 百五丁

○用金等申付る者取締 十月

○御東幸又付諸藩公議人出京十五日 百十三丁

○皇漢學假校被設入學御差許九月 百十四丁

○僧分猥又復飾禁止十八日 百十五丁

○犯罪一等減の御赦日同 百十六丁

○議政官被廢九月 百十八丁

○高野金剛峯寺復號三派廢止日同 百十九丁

○御東幸御出輦日御治定日同 百廿一丁

○東京府内外社寺諸願伺順序日同 百廿一丁

○鎌倉五山貸附金取立禁止日同 百廿二丁

○徳川舊臣御扶助出願期日九月 百廿三丁

- 御東幸行在中外國事務具申方九月廿四日 百廿四丁
- 神奈川府を縣と被改廿九日 百廿四丁
- 越後府を新潟府と被稱廿九日 百廿五丁
- 白峯神社御祭典被爲行廿四日 百廿七丁
- 郭内外邸宅處分同日 百廿七丁
- 大小藩郭内外邸地箇所定數同日 百廿八丁
- 京都詰合公議人東京へ被召出同日 百廿九丁
- 軍務官中裁判所御用掛廢局廿五日 百廿九丁
- 先皇帝御發喪御正忌日御再命廿六日 百三十丁
- 薩土紀三藩へ海岸燈臺築造廿七日 百三十丁

- 越後五郡新潟府へ所轄替廿九日 百卅一丁
- 諸河郊外等み於て鳥打發砲禁止同日 百卅二丁
- 信濃國御影自今伊那縣所轄月 百卅二丁
- 親王方以下諸官下馬乗場被改朔十日 百四十丁
- 金札石高拜借の府藩縣上納順序四日 百四十五丁
- 金札の通用を妨さず者處分七日 百四十六丁
- 金札不通用の藩々管内へ告諭同日 百四十六丁
- 御東幸着御み付百官奉職心得同日 百四十七丁
- 御諱三字闕畫九日 百四十八丁
- 平常諸藩兵へ府縣指揮み不及十日 百四十八丁

- 度會縣へ神領正米一万石被属十日 百四十九丁
- 御東臨皇居を東京城と被稱十三日 百五十六丁
- 諸願伺届等上包み要旨摘載日同 百五十六丁
- 徴兵巡邏兵等途上行列禮節日同 百五十七丁
- 失火の節諸藩邸板木合圖日同 百五十七丁
- 浮浪士處分方十四日 百五十七丁
- 氷川神社へ行幸被仰出十七日 百五十九丁
- 駿東十三州社僧復飾姓名届方日同 百五十九丁
- 鎮將府被廢十八日 百六十丁
- 同上又付會計局被相止十八日 百六十丁

- 日蓮宗於て神祇配祠神號書記禁止十八日 百六十一丁
- 鎮將府支配當分行政官支配又被仰付十九日 百六十二丁
- 駿東州々中下大夫上士諸願伺差出方日同 百六十二丁
- 銅錢直増定額の通通用の事廿三日 百六十四丁
- 切支丹宗門政方廿五日 百六十五丁
- 氷川神社御參拜日同 百六十五丁
- 同上又付本日東京御發輦廿七日 百六十七丁
- 天下一般孝子義僕等御褒賞賑恤被爲行日同 百六十七丁
- 藩治職制被定廿八日 百六十八丁
- 新律御頒布迄形法取計方廿九日 百七十二丁

- 中大夫以下東京定府被命廿九日 百七十四丁
- 甲斐府被置同國諸縣被廢日同 百七十四丁
- 西城を行宮登城を參内と被稱日同 百七十五丁
- 鐵砲洲居留地外地所外國人貸渡禁止月十 百七十五丁
- 親臨萬機御親裁又付百官有司心得方月十 百七十六丁
- 三等官以上節朔參賀及刻限月十 百七十八丁
- 諸侯供廻定則外人數召連禁止月十 百七十九丁
- 東京府下盜賊取締方月十 百八十丁
- 徵士三等官以上の者座順月十 百八十二丁
- 東京へ五官出張所御取建月十 百八十二丁

- 御記録編輯又付五官日記書類取調四十一日 百八十四丁
- 四等官以下元御内玄關代より昇降日同 百八十五丁
- 柏崎縣被廢自今新潟府へ管轄日同 百八十七丁
- 佐渡縣新潟府へ同斷日同 百八十七丁
- 天下水利治河の方法府藩縣へ被令六十一日 百九十丁
- 太田大河内兩藩所領地下賜十一日 百九十一丁
- 御東幸中諸侯天機伺御定日十一日 百九十二丁
- 諸願伺屈等出頭の者昇降口十一日 百九十四丁
- 治河使を被置水利を被興十五日 百九十四丁
- 万石以上以下東京邸宅所替日同 百九十七丁

- 同上より付東京府へ御達十一月十五日 百九十七丁
- 京都傳馬所被定人馬遣方十七日 百九十九丁
- 宮親王以下外國人途中出會通行方同日 二百三丁
- 新嘗祭被行月十一 二百三丁
- 御郭内外出火の節參内心得十八日 二百七丁
- 除刑日御定同日 二百八丁
- 諸藩姓氏又國名等の代稱自今本姓稱呼十九日 二百十二丁
- 箱館産物賣捌方二十一日 二百十二丁
- 東京より還幸日御治定朔十二日 二百廿二丁
- 跡目相繼隱居家督養子縁組願方二十二日 二百廿三丁

- 諸侯嫡子叙任自今不被仰付十三日 二百廿四丁
- 五島氏領民邪宗信仰の者處置同日 二百廿四丁
- 長崎府へ同上心得方同日 二百廿五丁
- 金札東北平定より付石高割賦御着手四十二日 二百廿六丁
- 金札御發弘後分合を付取引禁止同日 二百廿七丁
- 月俸の外別御手當自今不被下同日 二百廿七丁
- 寺院旅行自今最寄府縣印鑑みて通行五十二日 二百廿九丁
- 還幸御道調の役々々東京御發途同日 二百三十丁
- 東京來る八日御發轎みて還幸同日 二百三十丁
- 同上御警衛筋より付沿道諸藩へ御達同日 二百三十丁

- 同上 又 付 沿道府縣へ御達 十二月 二百卅一丁
- 醫業の輩學術研究の御告諭 十二月 二百卅五丁
- 奥羽兩國を七國に被分 日 同 二百卅六丁
- 大宮九條家へ御方違行啓 日 同 二百四十五丁
- 同上行啓後御機嫌伺 日 同 二百四十五丁
- 三等官并權辨事九門内騎馬乘興被許 日 同 二百四十五丁
- 親王方宮門内乘馬通行被免 十二月 二百四十六丁
- 大廟へ東北平定の成績被爲告 日 同 二百四十六丁
- 同上將士功勳の御賞典明春被爲舉 十二月 二百四十七丁
- 自今本姓に非る松平稱號被止 十二月 二百四十七丁

- 再御東幸に付本丸城蹟へ宮殿御造營 十二月 二百四十九丁
- 皇學所御開設勤學規則被定 十二月 二百四十九丁
- 諸家自領外の者へ苗字帶刀差許禁止 十二月 二百五十二丁
- 藩士兵卒等九門内妄り通行制止 十二月 二百五十三丁
- 市中の者旅人等同斷 日 同 二百五十三丁
- 寺院の内府藩縣の所轄不受向制禁 十二月 二百五十六丁
- 八王子舊同心軍務官へ所轄替 十二月 二百五十七丁
- 東京公議所御設立 日 同 二百五十七丁
- 東京より還幸御治定 十二月 二百五十八丁
- 同上に付五官知事奉迎 日 同 二百五十九丁

- 同上（二百五十九丁） 付在京諸侯參内十五日
- 五等官以下諸官人從前の位記返上月十二日（二百六十一丁）
- 身分違よて町村地所買取者心得十八日（二百六十一丁）
- 仲間鳶の者商店不法の振舞禁止日（二百六十一丁）
- 國事（二百六十二丁） 斃る者御慰祭其妻子御賑恤日
- 篠山藩領地替日（二百六十三丁） 同
- 五等官以上歳末御禮二十日（二百六十六丁）
- 公議所開議期日議員撰舉方日（二百六十七丁） 同
- 先帝三周御忌御祭奠（二百六十八丁） 又付服者參内を憚日
- 同上（二百六十八丁） 又付天機伺日 同

- 同上（二百六十八丁） 諸臣參拜方二十日
- 同上（二百七十四丁） 神祇式を以御祭奠山陵御參拜廿一日
- 同上（二百七十四丁） 自廿三日（二百七十四丁） 至廿六日（二百七十四丁） 行幸并百官參拜日 同
- 泉山參拜の者御齋自今不賜日（二百七十五丁） 同
- 御用納より來春御用始御定日（二百七十六丁） 廿二日
- 富興行御禁止日（二百七十六丁） 同
- 各藩租稅收納方并職制（二百七十八丁） 廿三日
- 產婆墮胎賣藥取扱等禁止（二百八十三丁） 廿四日
- 東京昌平開成兩校御開并規則（二百八十四丁） 廿五日
- 諸官員へ立入内願筋取次等禁止日（二百八十四丁） 同

○ 神職繼目願順序月十二 二百八十六丁

○ 公卿諸侯三等官以上節朔參賀登城廿七日 二百八十八丁

○ 病院當分軍務官治療所と改唱月十二 二百八十八丁

○ 行政官并辦事

○ 平野本堂二氏藩屏よ被列月七 三十七丁

○ 徳川氏舊臣御扶助願處分二月 四十八丁

○ 同氏駿府へ入邑よ付金穀下賜五月 五十一丁

○ 諸官御沙汰御達文例八月十三日 五十六丁

○ 御東幸沿道諸藩へ金札御貸下八月十四日 六十丁

○ 長崎府砲臺廢存并守衛八月十七日 六十丁

○ 軍艦の外諸船艇烙印納税八月十九日 六十一丁

○ 諸藩公務人公議人と改唱八月廿日 六十二丁

○ 官兵創傷治療の爲洋醫被差遣同日 六十二丁

○ 昌平齋二十歳以下勤學被命八月廿二日 六十三丁

○ 外國人へ輕舉粗忽振舞嚴禁同日 六十四丁

○ 御東幸よ付駿東列藩出府同日 六十四丁

○ 外國人雇入願方順序同日 六十五丁

○ 萬石高以下歸順者御扶助割同日 六十五丁

○ 御即位の式古禮よ被復八月廿三日 六十七丁

○ 同上御大禮百官排列式同日 六十七丁

- 本願寺外五寺耶蘇徒教誨願 廿三日 六十九丁
- 浦上村耶蘇徒肥前藩へ取締被命 同日 七十丁
- 府縣兵員區々取立被差止 同日 七十丁
- 崇徳帝神靈讚州より御還還 廿四日 七十一丁
- 御誕辰天朝節御執行天下停刑 廿六日 七十二丁
- 本日御即位御大禮被爲行 廿七日 七十七丁
- 先帝御發喪日を御正忌日と被改 廿九日 七十七丁
- 東京行幸九月中旬御出替 同日 七十八丁
- 御東幸御道休泊人夫遣方注意 同日 七十八丁
- 貨幣鑄造の者各地方取締 同日 七十九丁

- 舊來脱藩の輩復歸可全信義御示諭 八月 八十丁
- 大小藩郭内外藩邸箇所 八月 八十一丁
- 總督參謀以下勳功式三等被定 八月 八十四丁
- 駿河藩士御扶助願出御役所替 八月 八十九丁
- 山陵御參拜御出替日御治定 八月 八十九丁
- 河東練場練兵天覽行幸 八月 九十丁
- 鎮將府へ進達書差出方 八月 九十丁
- 東京御親臨不遠御出替 八月 九十丁
- 品海脱艦處置各國公使へ通知 八月 九十一丁
- 宗規一新の爲十二ヶ寺上京被命 九月 九十四丁

- 御東幸又付御道調役下向 九月 四日 九十八丁
- 諸役并苗字帶刀差免の者山緒調 九月 五日 百一丁
- 租税金納の分其他都て金札上納 九月 七日 百三丁
- 提灯印御規定 八月 八日 百四丁
- 崇徳帝神靈白峯宮へ御遷還被爲在 九月 十四日 百八丁
- 征討諸軍へ防寒の爲毛布一着宛を賜 同日 百九丁
- 生野銀山爲點檢佛人同道役々出張 同日 百九丁
- 御東幸御道筋迷惑不致様供奉注意 同日 百十丁
- 同上又付旅籠并人足賃切手拂 同日 百十丁
- 自今一六日休暇 九月 十八日 百十七丁

- 御東幸中又付立猪御祝不被下 九月 廿三日 百廿六丁
- 金銀紙幣取交通用の御再達 同日 百廿六丁
- 神祇官を元學習院へ被移 九月 廿六日 百三十丁
- 古金銀引替被仰出 十月 十日 百五十二丁
- 例月五日の日資治通鑑聽講被仰付 十月 廿日 百六十三丁
- 各藩公議人へ議事の儀御沙汰 十月 廿五日 百六十六丁
- 御東幸又付府下人民へ御酒下賜 十月 十月 百七十一丁
- 東海中山北陸藩々官軍へ金穀調達 十月 十月 百七十七丁
- 越後留戍官軍金穀最寄府藩縣取助 十月 十月 百七十七丁
- 徳川浮浪徒東京府於て處置方 十月 十月 百七十八丁

- 目安箱書面自今行政官於て御調三十一日 百八十三丁
- 角力芝居等無木戸錢見物の徒制禁日 同 百八十三丁
- 開成所自今行政官御所轄三十一日 百九十三丁
- 同上又付東京府へ御達日 同 百九十三丁
- 諸侯家督相續叙任御禮獻上物十五日 百九十六丁
- 同上又付大宮御所へ獻上物日 同 百九十六丁
- 東京病院同府へ所轄日 同 百九十八丁
- 新營祭又付三等官以上參集刻限十七日 二百六丁
- 同上又付在東京諸侯參賀刻限日 同 二百六丁
- 東京鐵砲洲開市日并武家通行方月十一 二百七丁

- 万石以上以下邸宅拜領拜借願順序月十一 二百九丁
- 中下大夫上士歸順の輩へ御達月十一 二百九丁
- 病院醫官治療取締方月十一 二百一十二丁
- 本祿安堵の輩扶持米の稱廢止十八日 二百一十二丁
- 軍務官支配病院京都府へ所轄替二十一日 二百一十三丁
- 宮堂上方知行所事務最寄府縣取扱方廿五日 二百一十三丁
- 中大夫以下同上日 同 二百一十五丁
- 在京諸侯天機伺廿七日 二百一十六丁
- 駿遠參三州の領主へ土地替地の心得日 同 二百一十六丁
- 中下大夫上士東京定府被仰付日 同 二百一十七丁

- 花押彫刻の弊習御禁制 廿八日 二百十七丁
- 隱居家督養子元服等願立成規 日 二百十八丁
- 生駒大内藏藩列又被加 三十日 二百二十丁
- 議事體裁取調所御取建 日 二百二十丁
- 諸藩分知末家舊幕府附屬の者御處置 月十一 二百廿二丁
- 府縣議員徵集會議の心得 月十一 二百廿二丁
- 神衛隊復籍被仰付 月十一 二百廿二丁
- 帶刀人僧尼市中住居の者區費出金 月十二日 二百廿三丁
- 京都府支配病院軍務官へ引渡 月十二日 二百廿七丁
- 還幸御當日奉迎御場所 月十二日 二百卅四丁

- 外國事務局東京運上所と改稱 月十二日 二百三十四丁
- 府藩縣管轄地圖取調方 月十二日 二百四十七丁
- 東北諸藩へ金札石高割御渡 日 二百四十八丁
- 中大夫以下領地養老賞典被下方 月十二日 二百五十三丁
- 天機伺并御番諸侯着到御届 日 二百五十四丁
- 諸願伺書へ御指令附箋の體被定 日 二百五十四丁
- 大宮へ爲御機嫌伺九條家へ參入 日 三百五十六丁
- 駿遠參領地有之中下大夫上士へ御達 月十八日 二百六十四丁
- 徳川氏へ賜祿み付三河縣へ御達 日 二百六十五丁
- 毎月朔并年始歳末參賀刻限 月十九日 二百六十五丁

- 來廿八日 女御入内即日御立后十九日 二百六十六丁
- 酒井南部安藤三氏へ領地下賜廿二日 二百七十七丁
- 醫學所學校所轄廿五日 二百八十四丁
- 在官の輩拜借金返上御免廿八日 二百八十五丁
- 自今農民訴訟筋租稅司へ差出方廿八日 二百八十六丁
- 兵隊東京府於て召捕節軍務官へ引渡方十二 二百八十九丁
- 五等官以上減俸の分交附方十二 二百八十九丁
- 諸家來御車寄邊徘徊制止月十二 二百八十九丁
- 諸官員御登庸御規則月十二 二百九十一丁
- 養老御扶助被下方取調月十二 二百九十一丁

- 外國事務局運上所と御改唱月十二 二百九十三丁
- 七月十四五兩日御祝日七月三日 一丁
- 重き御沙汰辨官一途御扱月八 九十二丁
- 來己年賀の輩着服の制十八日 二百六十五丁
- 同上六等官以下着服の儀再達二十日 二百六十九丁
- 駿東府縣自今行政官所管月十二 二百九十二丁
- 鎮將府
- 苞苴私謁妄又推舉登用制禁八月四日 五十丁
- 一橋田安二氏宗家家來召抱方八月十二日 五十五丁
- 東京市中又係る金銀并租稅方八月十八日 百十七丁

- 各藩外國船雇入願出順序月 百卅二丁
- 御着輦當日諸官奉迎所月 百卅三丁
- 駿河藩脱艦殘賊追捕月 百卅四丁
- 諸藩脱走屯集の徒處置月 百卅五丁
- 御東幸に付御盛業宣揚心得 百四十九丁
- 軍功賞典の擧御下問日同 百五十丁
- 軍務官
- 諸御門并諸關門警衛規則 五月 百一丁
- 驛遞司
- 宮堂上領民壹今年人夫遣高調 五月 三丁

- 宿驛休泊足賄等の弊禁止 七月 十二丁
- 諸街道人馬遣高制限 七月 三十七丁
- 驛遞司の法則を以府藩縣諸道取締 九月 百五丁
- 助郷減役除免願の儀 同日 百七丁
- 宿助郷風儀不宜儀御告諭 九月 百十一丁
- 御東幸沿道助郷勤方 同日 百十二丁
- 京都假傳馬所取開并賃錢被定 二十日 百四十一丁
- 京師へ定便六日限差立方 十二日 二百九十三丁
- 東京府
- 御東臨み付府下の者營業可勵御示諭 八月 九十三丁

- 墮胎賣藥等の所業禁制 九月四日 九十九丁
- 市中取締諸藩兵隊へ被命 九月九日 百廿五丁
- 御誕辰御嘉節工商休業 九月九日 百廿五丁
- 御着輦御道筋取締心得 九月廿七日 百卅六丁
- 同上市中火の元心付方 九月九日 百卅九丁
- 府内外に於て小銃打射制禁 九月十九日 百六十三丁
- 御東幸に付市中へ御酒を下賜 八月十八日 百七十二丁
- 商法株鑑札御渡品物濫製取締 十月十日 百八十一丁
- 地圖書籍等御地名東京と記載 十一月四日 百八十五丁
- 御東幸に付囚人へ御酒を下賜 同日 百八十六丁

假名 公布に寫第二册目次 終

- 失火の者御咎筋に付不取留流言御禁止 十一月五日 百八十八丁
- 奥羽北越凱陣の兵隊市中商家止宿差止 同日 百八十八丁
- 来る十八日新嘗祭に付御示諭 同日 百八十九丁
- 東京開市日御治定 十一月十一日 百九十八丁
- 同上に付外國人市中止宿禁止 十二月三日 二百廿五丁
- 同上に付八町堀新規町割へ移住出店御許 十二月四日 二百廿八丁
- 空米帳合商制禁日 同日 二百廿八丁
- 東國金札通用被仰出 十二月五日 二百卅二丁
- 府下の者へ金札御貸渡方法 十二月二十日 二百六十九丁

假名
傍訓
公布
に
寫
第二册

○明治元年 辰

辨事御達 七月三日

一來五日七日休日之事

右に付六日例休の處出仕可有之事

一來十五日休日之事

但節朔同様參賀之事

一來十四日御祝日又付議參辨事五官三等以上内外御番の
面々兩親具慶の分參賀の上賜祝酒候事

〔太政官〕御布告 同月四日

先達て驛遞司より御用狀たりども無賃錢よて繼立候儀不
 相成候旨御布告有之候處于今無賃よて差立候向も有之由
 甚以不都合の次第候以後の七月晦日限りよて右様の儀
 有之候への如何様の差支有之候共其宿驛よて留置繼立不
 致様申達候間心得違無之様可致候事

〔太政官〕御沙汰 七月四日

徳川龜之助

先達て扶助願出候者格式居所并是迄の勤向相記し人別年
 齡等細に取調來る十日限り可差出候旨御沙汰候事
 〔同 官〕御沙汰 七月

西尾 隱岐守
 松平 能登守
 大久保 中務大輔
 太田 備中守

今般駿河國中徳川龜之助へ下賜候よ付其藩同國の知行所
 御召上よ相成爲請取役人被差向候間引渡方無差支様可取
 計候事

但右替地の儀へ追て可被仰出候事

〔驛遞司〕御達 同月五日

先達て御達有之候通不日京都傳馬所御取立よ可相成候よ

付宮堂上家領民壹箇年遣高家々々にて不同有之候間每家見
込書相認七月廿日迄も無遅滞當局へ御差出可有之候事

〔太政官〕御布告 七月六日

東海道筋江戸表迄

一三日限仕立

金廿壹兩貳分

一三日半限

同拾六兩貳分

一四日限

同拾貳兩

一五日限

同九兩

一六日限

同六兩

右何れも掛目三百目迄其餘拾匁又付

金壹朱宛

一正六日限幸便

御狀壹通又付

金貳朱

但掛目拾匁迄其餘拾匁又付

六百文の割

一早便

御狀壹通又付

五百文

但掛目五拾匁迄
其餘五拾匁迄

七百元

御荷物壹貫目又付

九貫五百文

一中便

御狀壹通又付

三百文

御荷物壹貫目又付

五貫文

西國筋

一播州路

明石

林田

姫路

龍野

一同國

三日月

赤穂

正九時限仕立 金三兩

十一時限同 同貳兩壹分

十三時限同 同壹兩貳分

但何れも掛目宛の割
餘百目も付八匁の割

十時限仕立 金三兩三分

十二時限同 同三兩壹分

十四時限同 同貳兩三分

但何れも掛目宛の割
餘百目も付拾匁の割

一藝州

一長崎

二日半限仕立 金八兩貳分

三十四時限同 同七兩貳分

三日限同 同六兩

四日限同 同三兩貳分

五日限同 同貳兩貳分

六日限同 同貳兩

三日半限仕立 金三拾兩

四日限同 同八兩

五日限同	金六兩貳分
六日限同	同四兩貳分
右何れも掛目 百目迄の割目	
幸便	
書狀壹通	金壹分貳朱
狀箱の類壹通	同三分貳朱
但道中十六七 日目よ着の積	
正二時限仕立	金壹兩貳分
三時限同	同壹兩
一 大坂表	

四時限同	同三分
五時限同	同貳分貳朱
六時限同	同貳分
右何れも申刻迄 差立候分	
但申刻よ相掛り 差立候節ハ夜増 として賃金定の上へ	
五割増よ候事	
一同所幸便の分	
但無箱狀壹通	
一 出口走	三百文
一 店走	百文

一判元

七拾貳文

一大封

百文

一中封

七拾貳文

一金子入

百文

右狀壹通箱入よてり一倍半増よて都合貳倍半の直段よ
相成候事

一奈良へ仕立

四時限

金壹兩貳分

六時限

同壹兩

書狀壹通

明日届け

八百五拾文

明後日届け

百文

一丹後久美濱迄仕立

二日限

金貳兩貳分

一但馬生野迄同

二日限

同貳兩貳分

一兵庫へ仕立

四時限

同貳兩貳分

五時限

同貳兩壹分

六時限

同貳兩

八時限

同壹兩貳分

幸便書狀壹通

一店走

貳百五拾文

一判元

百七拾貳文

狀箱入の二倍半の直段も候事

此度御用狀たり共無賃錢にての繼立不相成旨被仰出候も付別紙の通會計官より指出候飛脚賃錢定帳爲心得相廻し申候事

但御用の品至急の儀に格別其餘纔か半日一日の發途もて其賃多分の相違も付精々省畧の心得可有之事

〔驛遞司〕御布告 七月六日

御用出兵の向々休泊の節米錢共夫々御定を以御拂被下置候付ての代料相當の膳部差出候へば宿方も於て別段足し

賄相立儀の無之筈の處從來の舊弊も泥み不申付料理等差出却て宿方難澁の趣申觸候者も有之哉も相聞へ不埒の事候方今軍用御多端の御中もは被爲在候得共下民の難澁は深く御厭被遊候御趣意の程難有拜戴仕代料相當の膳部差出候て足し賄等費の不相立様可致勿論通行の向へ對し不敬の儀に堅く致間敷事

〔太政官〕御布告 同月七日

諸寺院願立伺等の儀山城國中は京都府諸國は府藩縣へ可申出候若其難決儀の府藩縣より辨事官へ可申出候事但官位并參内願等朝廷へ關係候事は執奏へ可申出若執

奏無之分は直々辨事官へ可願出事

〔太政官〕御布告 七月七日

當春以來征討奮戰忠死の靈來る十日十一日兩日於河東練

練場祭奠式被仰出候事

右又付十日巳の刻より申の刻迄十一日辰の刻より未の刻

迄の内諸官參詣可爲勝手事

右刻限の内諸人參拜被差許候並有志の輩詩歌を供じ且兵

隊練式等慰靈魂候儀可爲勝手事

但靈前詰の者へ夫々相斷不及混雜様可致候事且從朝廷

御祭奠金下賜候へば他方より料物奉納の儀被止候事

〔同 官〕御沙汰 同月十日

徳川龜之助

方今萬機維新の折柄出格の思召を以て龜之助へ城地大祿

と下賜藩屏の列に被召加祖先の廟食を不絶累世の血統を

繼しめ給ふのみならず其藩士共扶助難行届候て朝臣相願

候者も是又洪大の御仁恵を以王室國事も奉務爲致候儀廣

大の恩典といふべし然處頃日其藩士激烈の徒一時壯年血

氣の所業も候哉右歸順致し候者も不臣背恩の者杯と稱し

甚敷も至りては侮慢罵詈訶劍戟等と以て相脅し歸順を妨候

趣相聞へ是如何なる所在も候哉畢竟中葉以降王室大衰

へ政教天下よ洽からず中よも關東の如きは往々朝廷の尊
 きを不知者あるよ至るより右様不心得の者可有之候得共
 苟も武門よ従事し世々皇化の域よ覆育候者今日よ至り尙
 天地の大義萬世の定分を不辨候は如何よも無謂事よ候今
 也朝政草創の日兵事未鎮一定深く聖慮を惱し給ふの時節な
 れば其藩の主従よ於ても能々是を體認し奉り天下蒼生の
 爲めを思ひ王事よ鞠躬勉勵致し上は朝廷寛大の御仁恤を
 奉戴し下の慶喜恭順の義を不失様致し候こそ實よ至當の
 道よ可有之候若右等の暴動有之候ては別して其藩の爲不
 可然事よ候間龜之助は勿論重役共よ於ても此等の所篤と

相心得 精々懇切に示諭を可加事
 〔太政官〕御布告 七月十二日
 古人の説よ大亂の後必ず飢饉ありといへり且洪水大旱は
 古來聖明の世と雖も免れざる處也今春より霖雨滂沱氷災
 農民の患をさし氣候不順既に苗蝗の害あり此上七八月の
 末よ至り萬一大風有之ときは米價倍々騰貴し諸藩は鎖津
 を致し奸商は買占等を專よせバ窮民の難澁一方ならず
 寡孤獨何を以て餓死を免れん民の上たるもの預め策らず
 んバあらず況んや皇政一新億兆の民は再び父母を得るの
 念よ生ずる時よ當り賑恤の典一日も怠るべうらざるをや

依之府縣の諸役人専ら心を此事に盡し其支配所民口の多
 少に應じ預め米穀の流通と謀り鎖津買占等の所業を禁じ
 或は彼地より此地に輸し此地より彼地に送り互に有無相
 助る等今より目算を立べし其上不足の見込されば機會よ
 應じ非常の取計もあるべければ府縣の諸役人能々相考へ
 早々言上致すべし

〔太政官〕御達 七月十四日

凡在官の者病氣不參五十日滿れば辭表可差出若其儘保
 養可遂様被仰付候まねひて又五十日療養致其上全快不
 致節に再び辭表差出可申候事

但保養可致様被仰付候節居所を移療養等致度者は願出
 べし尤五十日未滿といへども病狀に因て同様可願出
 候事

〔同 官〕御布告 同月十五日

大坂地是迄外國入開市相成候處今度改めて開港と被仰出候
 事

〔同 官〕御布告 同月十六日

東征の節起りしより藩士は軍役も疲弊し沿道の民卒は夫
 役も勞れ上下困弊の折柄朝廷に於ても御痛慮不一方候處
 宮堂上の家士多く權威を以て妄に無宿錢無賃錢等にて往返

する者不少趣相聞候實又此役は朝廷の御大典又候間衆庶の中にも諸王公卿の家士は深く此旨を體認し尙心得違無之様可致旨被仰出候事

〔太政官〕御布告 七月十九日

石清水放生會自今中秋祭と被改候事

〔同官〕御布告 同月廿三日

武家屋敷を商人へ貸候儀の前々より嚴禁有之候處當春以來相弛み猥又町人へ貸置候趣又相聞へ候右の人別調並支配所自他の差別を失ひ不取締の筋又付以來武家地へ商人共差置候儀一切難相成是迄貸置候分も早々町地へ引

移候様可致候若家來分杯申唱等閑又致置候者並人別紛敷者差置候者調の上急度可及沙汰候事

〔詔書〕 同月廿七日

朕今萬機を親裁し億兆を綏撫す江戶の東國第一の大鎮四方輻湊の地宜しく親臨以て其政を視るべし因て自今江戶を稱して東京とせん是朕の海内一家東西同視する所以あり衆庶此意を體せよ

戊辰七月廿七日

〔太政官〕御布告 同日

慶長年間幕府を江戶に開きしより府下日よ繁榮に赴候ハ

全く天下の勢斯に歸し貨財隨て聚り候事に候然るも今度
 幕府を被廢候も付ての府下億萬の人口頼に活計も苦候者
 も可有之哉と不便に被思食候處近來世界各國通信の時態
 も相成候ての専ら全國の力を平均し皇國御保護の御目途
 を不被爲立候ての不相叶御事に付屢東西御巡幸萬民の疾
 苦をも被爲問度深き敬慮を以御詔文の旨被仰出候孰れも
 篤と御趣意を奉戴し徒に奢靡の風習も慣れ再び前日の繁
 榮も立戻候を希望して一家一身の覺悟不致候ての遂も活
 計をも失ひ候事も付向後銘々相當の職業を營み諸品精巧
 物産盛も成り行自然永久の繁榮を不失様格段の心懸可爲

肝要事

〔太政官〕御沙汰

七月廿九日

諸藩公務人貢士

議事の體裁御改正も付毎月三次の對策被廢候事

但見込存付の次第の何事も不寄不憚忌諱精々建白可致
 且議事の節の臨時も被爲召御下問可有之間兼て相心得
 可申旨被仰出候事

〔勅書〕

同月

朝綱一たび弛みしより政權久しく武門も委す今や朕祖宗
 の威靈も頼り漸も皇統を紹ぎ大政古も復す是大義名分の

存する所にして天下人心の歸向する所也嚮は徳川慶喜政
 權を還す亦自然の勢ひ況や近時宇内形勢日又開け月又盛
 かり此際又方て政權一途人心一定するも非ざれば何を以
 て國體を持し紀綱を振はんや茲又於て大ひ又政法を一新
 し公卿列藩及び四方の士と與ふ廣く會議公論を決するの
 素より天下の事一人の私する所も非ざればあり然るも奥
 羽一隅未だ皇化も服せず妄も陸梁し禍を地方に延く朕甚
 是を患ふ夫四海の内孰か朕の赤子もあらざる率土の濱亦
 朕の一家あり朕庶民も於て何ぞ四隅の別ををし敢て外視
 する事あらんや惟朕の政體を妨げ朕の生民を害す故に己

を得て五畿七道の兵を降し以て其不廷を正す願ふに與羽
 一隅の衆豈悉く乖亂昏迷せんや其間必も大義を明し國
 體を辨せる者あらん或は其力及ばず或は勢ひ支ふる能
 ず或は情實通せず或は事體齟齬し以て今日に至るかくの
 如きもの宜く此機を失い速かき其方向を定め以て其素
 心を表せば朕親まて撰ぶ所あらん縱令其黨類と雖も其罪
 を悔悟し改心服歸せば朕豈これを隔視せんや必も處する
 も至當の典を以てせん玉石相混じ兼猶共も同するの忍ば
 ざる所あり汝衆庶宜しく此意を體認し一時の誤りも因て
 千載の辱を遺すことおかれ

〔太政官〕御布告 七月

今般大坂銅會所鑛山局と改稱相成候間山出金銀銅共出高の多少によらそ總て右局へ御買上相成候間差出可申且金銀銅入用の儀候り、同局へ可伺出候尤銅の儀ハ常四月御布令相成候通國々所々よ於て屹度相守可申旨被仰出候事

〔同 官〕御布告 同 月

北野天滿宮神饌一社の願且神祇官より言上の通可供魚味被仰出候事

〔同 官〕御布告 同 月

駿河以東十三箇國社寺の儀所部の府藩縣にて支配可致候

處其難決事件ハ府藩縣より鎮將府へ可申出様今度改めて被仰出候事

但神社の儀兼て御布令の通勅祭神社大社の向等直ニ神祇官支配可受候且寺院の向官位并參内願等朝廷に關係候事ハ執奏へ可申出若執奏無之分ハ直ニ鎮將府へ可願出候事

〔同 官〕御布告 同 月

來る廿三日護良親王祭日ハ付於河東操練場神座相設け祭典式被仰出候事
右ハ付辰の刻より申の刻迄の内議定一人參與一人辨官事

一人並い各官知事か京都府知事き参拜さんの事
 但各官知事並か知府事差支ち候ひの副知事判事か参拜さんの事
 其餘諸官銘々そ参拜さん可為か勝手事て
 一諸人参拜しの儀ぎ被差許さ候事し
 一詩歌獻供し并諸藩練兵式し備神覽し候儀ぎ御免ご被仰出べ候事し
 但し神前詰しの者ものへ夫々相斷そ不及ふ混雜こ様可致さ事し
 〔太政官〕御布告 七月
 林昌之助しん其外脱走しの賊徒蒸氣船ぞくにて常州平瀨じやうへ上陸じやう其後
 何方の船ふねも有之哉あ平瀨港へ蒸氣船じやう三艘さん着岸ちやく發砲はつ及び候
 段か不屈ふの至いた追々御取調ごの上屹度え可被仰出べ品ものも有之候得共し

先當分の内石炭買得運送まの儀ぎ列藩共れつ願出ねんの上可取計し
 旨被仰出候事し
 〔同官〕 同月
 大總督宮鎮臺被免だい三條右大臣鎮將さん被仰出候事し
 但自今鎮臺府おの稱被廢あ候事し
 〔同官〕 同月廿七日
 東京在勤
 一鎮將
 右東國事務を總裁す
 一議定

一 參與さんよ

右立法の權を執り議政官の體よ法るべし

一 辨事べんじ

一 判事分課はんじぶんくわ

會計くわいけい

軍務ぐんむ

右行法の權を執り行政官の體よ法るべし

一 史官しくわん

一 筆生ひつせい

右鎮將被差置東國政務御委任被仰付候よ付十三ヶ國とく甲駿とるが
豆相武房上野與羽まめさむらいの管轄致し諸侯の事件に至迄総て取扱致とらひあつかひ

東京府とうきょうふ

知府事ちふじ

掌府内事務ちやうふないじむ

判府事はんふじ

權判府事ごんはんふじ

京攝けいせつは申に不及諸府縣に至る迄政務一定の規則被爲立候たてまわ
御趣意ごしゆいに付彼是組語不致様被仰出候事
但諸藩に於ても御趣意を奉體認右政體に法り追々改革かいかく
終に天下一定の規則相立候様の心懸可爲肝要候事かんえうたるべく

し可申尤大事件は時々奏聞と遂候様被仰付候事

〔太政官〕御達 七月

今般東京に於て當分鎮將府被立置駿河以東十三ヶ國豆駿相
武房上下總常可爲支配被仰出候問此段相達候事

〔同 官〕 同 月

一駿河以東十三ヶ國諸侯及中下大夫上士等上京並歸國共

一々々鎮將府へ可届出事

一同上諸願屈等の儀總て鎮將府へ可差出事

一駿河以東十三ヶ國諸藩公務人一兩人宛東京へ可相詰事
但相詰候者早々鎮將府へ可届出事

右の通被仰出候事

〔同 官〕 同 月

百姓町人共聊の由縁を以て宮堂上方へ入込用達又は館入
杯相唱へ提灯等御用と記し或は紋印を付け權威ケ間敷
振舞致し候者往々有之哉又相聞へ兼て御布令の趣も辨へ
おがら右様の所爲不届の至候若し以來相改めざる者見
付次第召捕へ御詮議可有之候屹度相心得候様被仰出候事

〔太政官〕御沙汰 同 月

歸京東海東山北陸
諸道鎮撫使等

久々軍旅殊又炎熱の砌苦勞又被思召今般歸京又付爲慰勞
賜酒肴候事

但大總督宮歸京被奏成功の上其勤勞又依り夫々御褒賞
の品も可有之候得共即時慰勞迄本文の通御沙汰候事

〔太政官〕御達 七月

中下大夫及上士

今般御暇被下置候又付ては銘々歸邑在所取締兵備充分勿
論又候然る處子弟以下若年の面々遠在僻邑有之候ては
文武研究如何可有之哉方今の形勢別て銳意奮發御用又相
立候様才能切磋可致又付ては嫡子以下部屋住の分は不及
申當主とても年齢三十未滿の面々は滯京修行願出候へば
當分陸軍局へ入塾稽古可被仰付候間其段相心得可申左候

へバ遅々人才御登庸の便利も可相成候又付右様被仰出
候御旨趣難有奉體認有志の面々は早々可申出候事

但身柄により多人數召連在京致居候ては修行難相成に
付本人に候ども在留修學の向は入塾の上諸藩塾生同様

相心得格外の省畧にて入塾可致賄等の儀は陸軍局よて
承合可申候事

〔同 官〕御達 同 月

府藩縣一定の御規則不相立候ては御政令多岐に涉り弊害

不少候就ては差當於京都府相定規則書遍く御示しに相成

候間若其土地民俗より難行條件且別紙良法心付候等の

儀は詳論太政官へ可申出退て御斟酌永世一定の御規則可
被爲立旨被仰出候事

但見込存付の儀は八月中に差出可申事

〔太政官〕御達 七月

細川越中守

菊地氏の儀は義祖武時以來累代王室よ勤勞し其誠忠臣分
の幕範に相成候段兼々御嘉尙被爲在且又加藤清正儀偉業
卓絶士民の仰慕する所朝廷よ於ては固より御旌表被爲在
度候處今般長岡左京亮より建言の儀御採用に相成候付て
は右二氏の祭祀其藩よ於て執行可致旨被仰出候事

但祠廟祭祀等手續の儀は神祇官へ可伺出候事

〔行政官〕御達 同月

平野内藏助

本堂式部丞

右二家此度藩屏の列よ被仰付候事

〔驛遞司〕御達 同月

一萬石以下五千石迄

東海道

人足

馬

拾三人

拾三匹

平日とも諸街道人馬遣高御制限被爲立候事
今般不圖差急上京の節御定賃錢を以驛々通行致來候分
も有之哉と相聞へ候右の未だ歸順の道も不相立以前も
付其分相對賃錢の割と以拂戻可申候事
右の通宿々相觸候も付爲御心得相達候事

〔太政官〕御布告 七月

兵隊繰出し方并諸品輸送等船手もて相運ひ候はゞ都て便
利に付與羽北越の賊徒鎮定に至る迄諸藩の軍艦蒸氣船は
勿論帆前船迄不殘御借上げ被仰付候即今既に公務に相用
ひ候船の格別其外各藩所持の船艦大坂兵庫兩港へ至急差

出候様御沙汰候事

但右差出候軍艦の内破損等有之分は於朝廷御覆被仰
付候且又諸藩より出陣先へ用向の者并に諸品類便船に
乗組致度儀願出候はゞ御聞届に相成候間此旨可相心得
事

〔同〕官御布告 同月

大學校御取建被遊天下の人才を集め文武ども盛に被爲興
度思召に候處方今御多事の折柄にて未だ御取調も行届兼
候處先兵學校假に御取調出來候に付來る八月二日より開
關被仰出候就ては兼て御布令の通先宮堂上及非藏人諸官

人等望み随ひ入學可致候就中三十未滿小番被免の輩に成
丈勤學致し候様可心懸旨被仰出候事

但入學の節一應太政官代へ可届出候且別紙の通規則被
立候し付夫々相心得可申事

兵學校規則

一入學の儀毎月十五日より相限候事

但入學當日正服の事

一入學願出の儀雛形の通美濃紙短冊に位階姓名年齢邸宅
等相認め陸軍局へ可申出事

雛形

官位何某嫡或次男

邸宅何町何通何の所

何某

當辰年何歳

一稽古の生徒毎朝七字三十分時揃の事

一八字より十字迄練兵十字より二十分時の間休息十字二
十分時より十二字迄兵學

右の外洋學數學等稽古望み随ひ可願出事

へ太政官へ御布告 七月

今般大坂銅會所鑛山局と改稱相成候間山出金銀銅共出高
の多少より並總て右局へ御買上相成候間差出可申且金
銀銅入用の儀候へ同局へ可伺出候尤銅の儀に當四月御

布令相成候通國々所々よ於て屹度相守可申旨被仰出候事
 〔太政官〕御布告 七月
 通用停止の丁銀豆板銀共御改製の新金銀を以御買上可相
 成旨兼て御布告の御趣意も有之候所未だ御改正の場合よ
 不立至候間所持の者の先可差出候右代り金の儀ハ銀位相
 當の價を以新金銀にて追々御下げ可相成尤代金御下げ有
 之候迄難澁の者への金札御下げ被置候ても又ハ金札にて
 御買上相成候ても銘々望に任せ可申候右の趣相心得來る
 八月五日迄員數并望の次第等會計官へ可申出候事
 〔同 官〕御布告 同 月

一 諸國税法の儀其土風を篤と不相辨新法相立候てハ却て
 人情に戻り候間先一兩年ハ舊貫に仍り可申若苛法弊習
 又ハ無餘儀事件等有之候ハ一應會計官へ同の上所置
 可有之事
 一 諸府縣共役向諸事相心得候者一兩人上京爲致置彼此の
 御用相辨候様可致事
 一 租稅納方諸府縣諸藩御預所共金の會計官米ハ大坂會計
 官へ當辰年より上納可致事
 但し御所二條兩御藏所納の儀可爲是迄の通事
 一 諸府縣月給共外諸入用凡積を以て租稅の内よて金穀備

へ置夫々取計ひ致し皆納の節會計官へ明細勘定帳差出候様可致事

一 舊幕廳下采邑沒收の分最寄の府縣并諸藩御預所可爲支配其他御處置未だ無之分の當分同様支配致し租稅取立置會計官へ可届出事

一 丁銀豆板銀通用停止被仰出候付ては是迄貢米代其外小物成運上物等一切可爲金納事

但金壹兩又付永壹貫文銀六拾目換の算當たるべき事

〔太政官〕御布告 七月

督典侍儀御誕生御親母又付大宮段々御内意被仰上候處格

別御考養の思召を以て從三位宣下自今被稱三位局席順可爲大典侍上旨被仰出候此段相違候事

〔同 官〕御沙汰 同 月

薩州 重役

長州 重役

土州 重役

積年王事又勤勞殊に當春以來所々出兵國力を竭し士卒を勵し奮勇銳進の段全く其藩主精忠無二の夙志より從事報効有之事又候へ共猶其方共も朝命奉戴闔藩士氣振興鼓舞行届候儀と深く獻感被爲在候依之此品下賜候愈以其藩主

を輔翼し可遂忠節旨御沙汰候事

備前重役

因州重役

尾州重役

右同文

（行政官）御達

八月二日

徳川龜之助

今般新こんぱんあらたより七拾万石を下賜くだしたまはり祖先せんぜんの廟食べうじきを紹しゅうしめ玉ふと雖いへども是迄こゝまで數方たかの家來けらい共養育ともやし不行いへやをより届儀いひやまひの顯然けんぜん又付格別かくべつ御仁惠ごにけいの思食おぼしめしを以て無祿むろくの者もの於朝廷てうてい夫々それぞれ御扶助ごたすけ被仰付おほせま候段去六月

十三日御沙汰書を以相達重役共より姓名取調可願出被仰渡候處日限度々延引のびひき又相成剩あまつせへ家來共不心得を以異論中立候者も有之杯申出候次第畢竟重役共御趣意を取失とれま以心得方不かたよろし宜より不都合を生じ候儀ごうぎの候得共屢御布告も被爲在候末の儀ごうぎ又候得ごうぎバ士たる者も亦人々相應の名義相辨へ可申筈の處無其儀種々邪論を唱へ人心を惑し候段御趣意又悖り候而已ごうぎからせ却て混亂を生じ候爲體如何ごうぎも不束の至ごうぎ又候依て屹度御沙汰ごうぎも可被及の處是又厚御仁恕を被爲垂御答不被仰付候得共此度の處共方より御扶助願出候儀ハ被差留候間末々ごうぎ至迄篤と相心得御奉公等願出

候者ノ御扶助可被仰付候間銘々志願ノ儘書取を以鎮將府
へ可申出旨被仰出候事

〔鎮將府〕御布告 八月四日

芭苜私謁を以て自ら公平の御政道を破り候儀兼て從朝廷
御沙汰の趣も有之候處當府の儀ハ御一新御手初めの折柄
諸事混同の憂も不少所謂賄賂私謁等を以て密々相計り妄
り又推舉登用人心を疑惑せしめ遂又奉汚朝威候次第於有
之ハ實以不易儀又候間家來未々又至迄瑣細の音物たり
共私又贈答決して不相成候若し相背候輩ハ贈者受者共可
爲曲事旨被仰出候事

〔行政官〕御沙汰 同月五日

徳川龜之助

今般駿河へ引移候又付淺草御藏又園有之候銅鐵御下渡願
出候得共不得其理候又付御聞濟無之依之格別御仁恕の思
召を以て別紙の通被下置候事
今般駿河へ引移候又付格別の思召を以て

米 三萬俵
金 二萬兩

下賜候事

〔太政官〕御布告 同月八日

今般改江戶稱東京是迄の江戶城へ鎮將府を被置民政裁判
所を會計局と被改候間此段相達候事

〔太政官〕御布告 八月

聖護院宮薨去ふ付鳴物停止の處機務御多端の折柄廢朝も
不被爲在候事故於此度の不被及其儀旨被仰出候事

〔同 官〕御達 同月十一日

聖護院宮薨去ふ付三ヶ日廢朝の處方今御一新機務御多端
の折柄不被及廢朝候事

右の通被仰出候間爲心得申達候事

〔同 官〕御布告 同月十二日

一親王大臣及三等官以上中仕切門外可爲下馬下乘事

一無役の公卿諸侯大手橋外可爲下馬下乘事

一中大夫以下總て下馬札よて可爲下馬下乘事

一三等官以上及無役の公卿諸侯可爲玄關通事

但無役の刀供侍よ爲持置玄關詰へ取次申入溜所よ相
扣狹み殿中徘徊不相成事

一中大夫下大夫有位の脇玄關無位の中の口可爲通事

但刀以下同斷

一四等官以下諸士の向中の口可爲通事

但刀以下同斷尤諸役人の格別の事

一 召連候人数大手橋内坂下橋内可爲政體御定の通此外兵隊召連候儀不相成事

但候待の者共腰掛又猶豫可有之尤諸役附供廻り中の

口門内左右諸局又相扣可申事

一家來の者共主人へ調見致し度節中の口詰へ取次可申入

事

一帶刀の外大手門通行禁止の事

但主人召連候の格別の事

右の通今般御規則被仰出候條此旨可相心得候様御沙汰候事

〔鎮將府〕御沙汰

八月十二日

一 橋大納言

田安中納言

先般藩屏の列に被召加候上は兵隊戦士等祿高相應の備不可欠事は候然處是迄の形にては兵士不足にて万一御奉公の道に可差支被思食候依て宗家龜之助家來の儀は由緒も別段の儀に付扶助行届難く或は暇差遣候者勝手召抱候様被仰付候間非常の節藩屏の任に不背様篤と可相心得旨被仰出候事

但召抱候者の出所名前年齢等夫々相記時々鎮將府へ可

届出候事

〔太政官〕御布告 八月十三日

當辰年の儀國より寄り戦争又の風水の災等も有之米價沸騰諸民難澁の趣相聞候依之當年酒造の儀元高の三分一仕込可申萬一心得違過造等致候者の嚴重御咎可被仰付候條此段向々より酒造人共へ可相達事

〔行政官〕御布告 同日

一被仰出被仰下被仰付御沙汰等の文字の行政官の外不相用候事

但大總督府鎮將府の格別より付御沙汰の文字相用候儀不

苦被仰出被仰付等の文字の不相成候事

一五官府縣より於て被仰出被仰下被仰付御沙汰候と可相認程の儀並より重立候御布告等の儀の行政官へ差出議政官決議の上行政官より御達相成候事

一御達書より總て行政官と相認候事

尤重立候事件より押印

一五官府縣より達書より其官其府其縣相記し候事

尤重立候事件より押印

一五官府縣共御布告の類其配下へ相達候文例左の通

〔行政官〕御布告 八月十四日

不遠東京行幸被仰出候ニ付東海道筋藩々へ御道筋の儀
ニ付別段の譯を以て兼て被仰出候石高拜借の金札三分の
一を以て御貸渡相成候間朝廷御仁恤の御趣意を體し領民
撫育方行届候儀可爲肝要候條金札取扱方専ら領民末々迄
御趣意貫徹融通相成候様取計可有之候事

但廿八日より晦日まで會計官ニ於て御下渡の事

〔同 官〕御達 同月十七日

長崎府

其府諸砲臺の儀更ニ規則相立要衝の場所へ府兵を置き

重守衛致し無用ニ屬し候分ハ相廢し候様被仰付候事
但砲臺の規則府兵の紀律等ハ追て於軍務官決議の上
下一般の御定則可被仰出候間其砌速ニ改正致候様心得
置候旨御沙汰候事

〔同 官〕御布告 同月十九日

舊來尾紀水三藩并旗下の名前を借り無税にて改も無之船
數多有之候處近來右様の名を偽り惡徒共不所業の次第も
有之趣不取締の儀ニ候間以來軍船の外假令武家所持の分
と雖も商船遊船の向不殘相改税銀上納改濟の分目印の
燒印相付可申無印の船決て往來不相成候事

〔行政官〕御布告 八月廿日

過日被仰出候公務人の儀今般御改_レ相成公議人と相唱其
職_レ即議員_ニとして朝命を奉承_レし藩情を達する事を旨とす
更_ニ公用人を相設け従前留守居役の職務を掌り候様可致
旨被仰出候事

但公議人員數の儀_ハ従前貢士の通たるべく候事

〔同 官〕御沙汰 同日

諸道官軍總督

諸道官軍暴露を不厭矢石を冒し奮戰勇闘追々奉捷効候段
敵感不斜候就て_ハ往々瘡氣_ニ感_レじ創傷を被り相惱候者も

可有之と深く不便_ニ被思召今般洋醫御雇可被差遣候間右
病氣等篤と治療相加へ精々調護行届候様可取計御沙汰候
事

〔同 官〕御布告 同月廿二日

方今更始の御盛典専ら人材御養育の思食_ニ付速_ニ大學校
を御興建可被爲在の處國家多事の折柄其儀難被爲行届候
間當分の内是迄の通於昌平學年七歳より二十歳_ニ至迄日
々出席勤學被仰付且三百俵以下の分_ハ爲御扶持壹人口づ
、被下置候間孰も御趣意を奉戴_レし妄_ニ詞章藻華の末流を
不費實用緊要の學_ニ基_ニき日夜研窮勉勵可致旨被仰出候事

〔行政官〕御布告 八月廿二日

外國交際の儀改て御取結よ相成就ての彼國人よ對し粗忽の儀有之候ての不易御差支よ相成候事故向後往來行違の節別て氣を付輕舉の振舞無之様兵隊末々迄屹度取締置候様被仰出候事

但近々築地開市よ付外國人繁々往來可有之自然不都合の儀相生候ての可爲曲事候間末々の者迄も不洩様屹度可申付候事

〔同官〕御布告 同日

先般御布告被仰出候通 皇上彌東京へ行幸被爲遊候よ付

駿河以東十三州管内の諸侯伯各叅勤可致旨被仰出候尤御發轅御定日被仰出候得バ速よ出府可致様兼て用意可有之候事

但方今賊徒平定よも不至候よ付各藩在所表兵備の儀の嚴重取締可成丈簡易輕裝よて出府可致候事

〔同官〕御達 同日

外國人私よ雇入の儀兼て御政體書よも被止置候よ付諸藩よ於て勝手よ雇入不相成儀の勿論よ候就ての以來相雇度向の願出の上外國官より差圖可致候間此旨可相心得事

〔同官〕御達 同日

萬石以下五千石迄	千俵宛
五千石以下三千石迄	五百俵宛
三千石以下千石迄	三百俵宛
千石以下五百石迄	二百俵宛
五百石以下三百石迄	百五十俵宛
三百石以下二百石迄	百俵宛
二百石以下百石迄	五十俵宛
百石以下四十石迄	四十俵宛
四十石以下先前の通	

右是迄俵取の者同斷且扶持米ハ被廢候事

但最初歸順并實効有之者不在此例事
 別紙の通被仰出候ハ付來る九月より高ハ應ヒ割合を以藏
 米被下置候ハ付同朔日より辰の口外元傳奏屋敷會計局へ
 爲請取可罷出事

〔行政官〕御布告 八月廿三日

此度御即位の大禮其式古禮ハ基キ大旌始製作被爲改九等
 官を以是迄の參役ハ令并立總て太政の規模相立候様被仰
 出中古より被爲用候唐製の禮服被止候事

〔同官〕御布告 同日

此度御即位御大禮の節舊議參役太政官九等の面々一同紫

宸殿階下より承明門内外より排列式を以て奉拜宸儀候様
被仰出候事

但府縣の知事判事在京の者參朝可致權官以下不及其儀
事

一衣帶の儀の舊議參役の面々東帶太政官九等官の面々有
位の東帶衣冠單差貫無位の黃袍衣冠着用の事

一此度參役并太政官當官より無之宮堂上在京の諸侯爲總詰
參朝被仰出候事

但衣帶の衣冠差貫の事尤無位の諸侯の直垂着用の事
一太政官等外の徴士雇士并在京の中大夫下大夫上士等便

宜の候所へ相詰候様被仰出候事

但直垂着用の事

右の通へ候間舊議參役并太政官當官排列の面々の廿七
日寅の刻參朝其餘の面々の卯の刻參朝被仰出候事

但重服者相除輕服者の不苦事

〔行政官〕御沙汰 八月廿三日

本願寺

東本願寺

興正寺

佛光寺

專修寺
錦織寺

九州表耶蘇の徒教諭盡力致度願の趣尤も候へ共既も巨魁
數人御取調の上藩々へ御預相成自餘の輩當分肥前藩へ屹
度取締被仰付候間於其宗旨教誨の儀不被及御沙汰候事
〔行政官〕御沙汰 八月廿三日

肥前少將

湘上村切支丹宗信向の徒當分其藩へ取締被仰付候間他も
浸染不致様嚴重取計可有之事

〔同官〕御沙汰 同日

府縣兵の規則區々も相成候てハ終も天下一般の御兵制も
難相立も付於軍務官規則御一定相成追て可被仰出候條其
節速も改正可有之御沙汰候事
但府縣も於て以來各々も規則相立兵員取立候儀被差止
候事

〔同官〕御布告 同月廿四日

今般讚岐國より崇徳天皇神靈御還還被仰出來月上旬當地
今出川通飛鳥井町へ着御も候事

但爾來も可奉稱白峯宮事
右も付神社へ獻備の儀願出度所存の者も品書を以神祇官

へ可伺出事

〔行政官〕御布告 八月廿六日

九月廿二日の聖上御誕辰相當に付毎年此辰を以て群臣は
輔宴を賜ひ天朝節御執行に相成天下の刑戮被差停候偏に
衆庶と御慶福を共し被遊候思食に候間於庶民も一同御嘉
節を奉祝候様被仰出候事

〔太政官〕御沙汰 同日

諸 候

來廿七日御即位に付禁中大宮御所等へ當日卯の刻參賀衣
體衣冠の事

但淺黃袴着用の輩當日薄色袴着用の事

一無位の輩直垂の事

一當日重服可憚の事

但當日所勞不參并重服の輩等の九月朔日より五日迄
の内は參賀候事の

一當日參賀の輩への御祝酒御認等被下候事

一在京諸侯獻物の儀の九月朔日より五日迄の内使者を以

奏者所へ可差出事

獻物人別

太刀

一腰

大宮御所へ家別よ

干鯛 一箱づ、

一 上京無之面々の重臣を以九月朔日より五日迄の内假建

よて恐悦可申上候獻物の奏者所へ可差出候事

但大典侍始并大宮御所上臈以下役々へ一切贈物よ不

及候事

一 當日南門被開候間南門外往還停止の事

但差掛候急御用向の警固の者へ可届事

右の通被仰出候事

中下大夫上士

來廿七日御即位よ付禁中大宮御所等へ當日卯の刻參賀各
衣體直垂の事

但當日所勞不參并重服の輩等の九月朔日より五日迄の

内參賀の事

一 當日參賀の輩への御祝酒御認等可被下候事

一 在京の面々の九月朔日より五日迄の内よ奏者所へ獻物
可差出事

一 在京無之面々の上京の節假建よて恐悦可申上獻物の奏
者所へ可差出事

献上物人別よ 以下前同文言

徵兵諸藩公議人公用人來る廿八日御即位御禮式御飾付於承明門外拜見の事被仰付候へ共徵兵公議人へ於承明門内拜見被許候事

但誘引の者有之候事

今度御即位よ付諸藩公議人來る九月朔日卯の刻より申の刻迄恐惶參朝可致旨御沙汰候事

但御假建へ參賀の事衣體の麻上下着用尤輕重服の輩不

及參朝候事

今般御即位よ付徵兵總代として右隊長の者來九月朔日卯の刻より申刻迄恐惶參朝可致旨御沙汰候事

但御假建へ參賀の事

〔行政官〕御布告 八月廿七日

天皇御即位御大禮被爲行候事

〔同 官〕御布告 同月廿九日

先帝御忌日は迄御發喪日を以て十二月廿九日と被爲定置候處今般御制度復古の折柄第一御追孝の思召よて古禮よ被爲基以來崩御御正忌の通十二月廿五日に被爲定候旨被仰出候事

但正當御忌日及毎月御忌日よも御精進等の末弊被廢候事

〔行政官〕御布告 八月廿九日

東京行幸九月中旬御出輦被仰出候事

但御道筋東海道の事

〔同 官〕御沙汰 同日

今般蒼生御綏撫被爲遊度思食を以御東幸の儀被仰出候處
當春以來數多の兵隊陸續御發遣等又付て沿道宿驛の難
澁不一方趣相聞へ旁非常御輕裝を以御發輦被爲在候程の
儀又付供奉の面々御趣意を奉戴し沿道休泊人夫使方又至
迄總て心を用ひ宿驛迷惑無之様可取扱候萬一權威ケ間敷
不條理の取計振於有之て當人の勿論其主人長官の越度

よも可被仰付候條小者末々又至迄聊心得違無之様其主人
長官より嚴重可申聞旨被仰出候事

〔同 官〕御達 同日

近年於舊幕府屢金銀吹替融通致し候以來贖金銀間々有之
實又萬民の迷惑不一形候當今太政御一新政體一途又基き
候折柄右様の所業有之候て不謂事又付於府縣も嚴重吟
味被仰付候條各藩の儀其主人より取糺可致候自然手懸
りの者有之節速又刑法官へ可申出萬一其領内不取締有
之他より洩聞候節其主人の落度たるべく候此段屹度可
相心得旨相達候事

行政官御布告 八月

近年有志の輩天下形勢不可已の處より往々藩籍を脱し四方又周流し義を唱へ難く死し數百年偷惰の風を一變し大に國家命脈を維持す今日朝廷御復古の運に際會するも自ら其倡首の力又資するもの不鮮候然も朝政一新萬機御親裁の秋と相成候ては皇國一體の政令被爲立府藩縣共一途に相歸し今後萬民天下に於て不可歸の府藩縣有之間敷候假初も其戸籍を脱し浮浪よて其身を終り或は其本を離れ別々容る、所有之候ては大に御政體に相背き萬一脱走の風盛ふ行れ僥倖の道相開け法は戻り制を破候様成行候

ては誰と共々國家を御維持可被遊哉既も當春浮浪の儀も付被仰出も有之候へ共猶又従前の功を不没將來の害を被爲防天下有志の輩と共々法を執り制を立べき御趣意を以て舊來脱藩等の輩此度夫々舊地へ復歸し戸籍を正し信義を全し其進退當を得一新の御政治神補候様被爲成度も付其處置可有之旨被仰出候事

同官御布告 同月

- 一郭中屋敷の家作共被召上候事
- 一郭外屋敷地の被召上家作の儀の出格御慈惠の思召を以被下候事

一大小藩共郭内にて屋敷壹ヶ所宛
 一郭外に拾萬石以上二ヶ所萬石迄壹ヶ所宛
 一萬石以下千石迄郭内にて壹ヶ所宛
 一千石以下都て郭内外にて壹ヶ所宛
 右改て此度被下候事
 但本文の趣若差支等有之候向に其旨可申立尤委細の儀
 の屋敷改掛へ可被問合候
 一郭内と相唱候塲所本町通西北の方を限候旨最前申達置
 候處東の方兩國川筋南の方芝口新橋川筋を限郭内と准
 じ候事

〔太政官〕御布告 八月

今般別紙の通被仰出社寺裁判所被廢候又付府内の勿論府
 外の社家寺院諸願同等是迄裁判所へ差出來候分來十二日
 より當分鎮將府傳達所へ差出可申候事
 但府内社寺領の事件並檢使見分等の東京府にて當分取
 扱府外社寺領の事件に其藩縣にて取扱可申尤其支配所
 未定の分の當分民政裁判所へ可差出事

〔同 官〕御沙汰 同月廿五日

神奈川府

品川沖へ碇泊の徳川龜之助軍艦并帆前船等八艘當月廿日

夜無屈何方へ歎出航候旨從東京申來り候既ニ龜之助ニ於
 てハ恭順罷在且軍艦乗組の者より歎願の趣被聞召届以格
 別の御趣意右軍艦等被下置候儀ニ付決て粗暴の舉動有之
 間敷候處如何の次第ニ候哉猶此上暴動候てハ主家ニ相
 係り候のみからば朝廷の多端の折柄紛擾を醸出し不易
 事ニ候間見付次第篤と糾問の上其子細可申出候萬一暴動
 及候ハ發砲擊挫不苦候旨御沙汰候事
 一行政官御沙汰 八月
 賊徒追討官軍進發已來所々奮戰堅きを抜き銳を挫き其忠
 勇義烈達天聽敵感被爲在猶又諸軍現地の勳功被爲知食臣

子の龜鑑ニ被備度敵旨を以て今般別紙の通豫め勳功の等
 級御定ニ相成候條督府列藩及參謀軍監長官等現地の事蹟
 精密取調偏頗彼我の見を去り公正至當の議を以て諸軍各
 部其等級を判し姓名書差出候様被仰出候事
 但御褒賞の儀ハ大總督宮及諸道總督歸京被奏成功の上
 御沙汰有之候事
 勳功式三等
 一總督副總督參謀等之ニ準定
 上功
 能く衆議を容れ畫策籌謀其宜を得以て大ニ四方を鼓舞し

終つひ天下てんか平定へいテイの績せきを底いすもの上功じやうこうとす

中功ちゆうこう

能たく一方いつぱうを維持ゐ持ぢし以もつて強敵きやうてきを挫くき終つひ天下てんか平定へいテイの業わざを助たすけるもの中功ちゆうこうとす又また諸隊しよたいを拔ひんで賊衝ぞくちゆうを奪うばひ全軍ぜんぐん長驅ちやうくの勢いきほひを逞たくましむるの類るい之これは準おんとす

下功げこう

以もつて多おほ當あた寡くわ勝かち敗は亡くわ獲と相等いご者しや下功げこうとす又また營壘えいり要地えうち等らうを固守こしゆし全軍ぜんぐんの潰敗くわいはいを維持ゐ持ぢする類るい之これは準おんとす一ひと司令官れいくわん諸隊長しよたいぢやう之これは準おんとす

上功じやうこう

使令しれい其宜きいしきを得え其隊たいをして同心きんしん協力けりやく進退しんたい坐起ざき自おのら法はふと合あし以もつて大敵たいてきを破やぶり要地えうちを拔ひき全捷ぜんせつを取とるもの上功じやうこうとす

中功ちゆうこう

寡くわを以もつて衆しゆを挫くき諸隊しよたい爲なる爲なる勇奮ゆうふん振起しんき其力ちからら終つひ全軍ぜんぐん及およぼすもの中功ちゆうこうとす

下功げこう

率そつ先勇進せんゆうしんすと雖いど隊下たいげ死傷しやう多おほきもの概おほして下功げこうとす或あるは強敵きやうてきを受うけ所部しよぶを指揮しし營壘えいり要地えうち等らうを固守こしゆする者もの之これは準おんとす

一兵士ひとへいし

上功

奮戰衆せんせんしゅう又超こへ堅かたきを摧くだき銃ていを挫くじき其身み銃てい丸まる鋒ほう鏑せき又また罹おるも
の上功じやうこうとす又勇進ゆうしんして衝敵せうてき所壘しよらい終つひに命めいを殞せきすもの或あるに率りつ
先奮せんけん激げき終しゆうに敵てきを敗やぶり良りようを獲とるの類るい或あるに其他そなた敵てきの大砲たいほう要器ようき
を撃げき壊くわいし輜重しゆうじゆう糧食りやうじきを捕と拿とする者亦また之これに準したがひ

中功

勵戰衆れいせんしゅう又先さきだち或あるに一隊いちたいに殿でんして力戰りきせん部伍ぶごを收おさめ其身み重おもく
創さうを被おふるの類るい概がいして中功ちゆうこうとす

下功

敵軍てきぐん披靡ひい勢せいに乘まじ追撃つゐげきして首級あたまを獲とる者下功げこうとす又力戰りきせん
敵軍てきぐん披靡ひい勢せいに乘まじ追撃つゐげきして首級あたまを獲とる者下功げこうとす又力戰りきせん

創さうを被おふるもの之これに準したがひ

行政官ぎやうせい官御沙汰 八月

徳川龜之助

重役中

其藩士そのはんし朝廷てうていの御奉公ごほうこう又またに御扶助ごかほじゆ等相願あひま候者ごうしやに鎮將府ちんしやうふへ可べ
願出ねんしゆ旨兼あひまて御沙汰ごさたに相成あひま候處ごうしよ此度このたび城中ちゆうじゆう取締とりあ向むか嚴重じゆうじゆう被仰出おほしゆしゆ
候ごうしよに付明つひ後ご十四日じゆうしちにちより日比谷門ひびやもん内元社うちもと寺裁てらさい判所はんしよにて爲取たゝりしゆ
扱あは候間ごうま同所どうしよへ願書ねんしよ差出さしゆ可申事べしんじ

同官御達 同月

先達さきだちて御延引ごえんいんに相成あひま候山陵さんりやう御參拜ごさんぱい來きたる廿九日にじゆうきゅうにち被仰出おほしゆしゆ候事ごうしよ

右よ付御出替迄重軽服者可相憚事

〔行政官〕御達 八月

來る三十日辰刻於河東練場鍊兵天覽行幸不拘晴雨被爲在候事

〔同 官〕御達 同 月

鎮將府へ諸向より願伺届等差出候節以來本紙よ寫書相添二通づ、差出可申候事

但寫書の分ハ半紙よ相認可申事

〔同 官〕御達 同 月

先般海内一家東西同視の思召を以て東京の儀被仰出候處

當春卒然兵馬の事起候より以來東國無辜の蒼生賊類の爲
よ塗炭よ陥り流離艱難其生を聊せ依之御親臨御綏撫被
遊度非常御手輕の御行裝を以て不遠御出替可被爲在の旨
被仰出候事

〔同 官〕御達 同 月

神奈川府

品川津碇泊有之候徳川龜之助所持の軍艦并蒸氣運送船共
都て八艘乗組榎本益次郎以下去る十九日夜品川脱走よ及
候旨別紙の通龜之助重役共より届出候元來右船の儀始終
品川よ碇泊有之舊主慶喜謹慎の意を體し狼よ揚碇致間敷

旨龜之助重役共より兼て屹度御受申上候末忽然脱走及
 剩へ奉對天朝悖慢不敬の書面等殘置候儀全反亂の所業よ
 て勿論主命を受せして無故致脱走候者畢竟海賊の所業を
 働候の必然又付別紙の通龜之助重役へ御沙汰被仰出候間
 右の趣各國公使へ其官より通達致し萬一開港場へ襲來外
 國人へ對し不法の舉動有之よ於ての時機も應じ如何様の
 所置致候ても不苦若又渡海等致候の各國政府も於ても
 嚴重拒絶相成兩國政府條約交際の際の御趣意混雜無之様取計
 可致旨被仰出候事

〔辨事〕御達 八月

總て御沙汰の類重き御達の儀官々よて取扱よての御政體
 又相背き候よ付以後當官よかいて一途よ取扱可申様被仰
 出候間此段可被相心得候事

〔東京府〕御觸 同 月

東京府の慶長以來追々繁榮皇國全州の一大都府も候處舊
 幕府被廢土地一時又衰弊致し府民生路を失ひ終り妻子も
 離散他方よ移り或の道路よ迷ひ候者も有之哉又相聞へ誠
 又歎歎被思召深き御慮を以不日京師御出替此地も御臨
 幸被爲在候間一同御趣意を奉戴し家業を勵み活計を營候
 様其掛りの名主共より隔々迄不洩様篤と可申聞候事

〔行政官〕御沙汰 九月三日

宗門制度の儀 頌徳の者 公議を遂げ 宗規一新 可奉報國恩旨
先般御沙汰相成候 又付別紙名前の者 共速 又上京為致會議
公論の上 一新の定則 可相立様被仰付候事

別紙

加州金澤 天徳院 奕堂

肥前長崎 皓臺寺 傳翁

江州彦根 清涼寺 雪爪

城州宇治 興聖寺 環谿

越中高岡 前瑞龍寺 橋僊

濃州下有知 龍泰寺 正仙

濃州今須 妙應寺 玄齡

尾州名古屋 萬松寺 鑑法

尾州熱田 法持寺 鼎三

加州金澤 寶圓寺 玄瑠

下總國府臺 總寧寺 元良

肥前佐賀 高傳寺 有菴

〔太政官〕御沙汰 同月四日

徳川龜之助

其方領知七十万石 駿河國一圓 其餘於遠江陸奥兩國 下賜候
旨被仰出置候處 陸奥國の自今未至平定候 又付今般改て 別
紙の通駿河國一圓 其餘遠江參河兩國の内 又於都合七十
万石 下賜候旨被仰出候事

駿河遠江國の内 御渡相成候 高

高二十三萬六千三百六十石餘

是の先達て 御渡相濟候 分

同十六萬四千五百七十八石餘

是ハ此度高附目録御渡相成候分

合高四十萬九百三十八石餘

此度御渡可相成取調高

同十七萬九千五百二十一石餘

遠江國

諸侯領

駿河國

久能山神領

同三千五百七十七石餘

合高十八萬二千五百七十八石餘

三河國

御料

同二萬九千百十四石餘

同八萬七千三百六十七石餘

同國

旗下知行

合高十一萬六千四百八十二石餘

總高合七十萬石

〔同〕官御沙汰 九月四日

酒造高百石未滿の分ハ願又寄百石迄ハ増方被仰免候事

但百石以上の内何石何斗等迄端石有之分ハ願又寄十石

迄増方被許候尤増石の分ハ一石又付金壹兩宛上納の事

千石以上の株高分高相願候向ハ二ツ割被免候事

〔同〕官御沙汰 同日

公卿諸侯并徴士等在職の地へ家族召寄候儀可爲勝手旨被

仰出候事

〔行政官〕御達

九月四日

今度東京へ就

行幸東海道筋爲御道調來る廿三日辨事五辻彈正大弼兵田

大和守役々の者附屬致下向候間最寄の府藩縣の役人共大

工職人共召連休泊へ可罷出候事

一行幸又付諸伺屈等の儀の其節可差出候事

一御一新又付ての舊弊又習ひ贈物馳走が間敷儀致間敷萬

二押て差出候輩有之よ於ての急度可申付事

一宿々傳馬所役人共舊習又泥し不正の所行致間敷諸事正

〔東京府〕御觸

同日

路又取扱驛郷一般難儀又不相成様可致若心得違の者於
有之の急度可申付事
一下向從者の輩舊弊所業不致様急度申付置候得共萬一心
得違致し候者有之節の其筋へ無遠慮可申出事
一休泊割付候得共御道調の模様又寄り前後異同可有之候
間差懸り止宿候共必心配取扱致間敷事

人民を繁育し五倫の道を教くするの累世の御要務又候所
おろし薬と唱へ妊娠の子を墮胎致し又の薬を與へ謝禮の
金銀を貪り家業同様又致し居候ものも有之由人倫又於て

有之問敷儀教化を破り風俗を害し以の外の事候右體の
 惡弊一洗相成兼候に全役人等閑の儀と相聞候間以後人民
 繁育の御趣意厚相心得未々も至迄精々申論倫理を失ひ候
 儀無之様可致候萬一此上右様の及所業候もの於有之の速
 り召捕吟味の上當人共の不及申其始末も寄町役人共も至
 迄も急度答可申付候
 右の趣町中不洩様可觸知もの也

〔太政官〕御沙汰 九月五日

大村丹後守

浦上村切支丹宗信向の徒當分肥前藩へ取締被仰付候間其

方領内も右宗旨浸染不致様精々取計可致旨御沙汰候事

〔行政官〕御達 同日

諸國御料所百姓町人共舊幕府より苗字帶刀及び諸役免許
 並扶持方等遣し置候者共其府縣にて取調其由緒御吟味の
 上御沙汰の品も可有之旨兼て御布令有之候處今以等閑も
 打過候向も有之趣も候間猶又其最寄もて早々取調可致旨
 御沙汰候事

但府縣へ右の通被仰出候間御料御預の藩々も於ても同
 様可心得候事

〔軍務官〕御布告 同日

諸御門并諸關門警衛の規則

一宮門御警衛兵員

一 小隊尤一晝一夜半隊宛常詰の事

但晝夜二人宛二時替まして面番の事

一 九門并七口關門警衛兵員

二 小隊尤一晝夜一小隊宛常詰の事

但一晝夜を四分よして一分隊宛面番の事

一 七口の外間道の關門警衛兵員一小隊の事

但詰番の儀の宮門の規則同様可和心得候事

一 諸御門諸關の内警衛の藩々固め人數外異變の節の相

應の援兵操出相成候様用意可致置事
右の通今般諸御門其外警衛の規則被爲立候間心得違無之
様可致旨申達候事

〔行政官〕

九月七日

皇國一圓金札通用被仰出候上の當辰年租税金納の分并諸
上納都て金札よて上納可致候事
但遐邑僻陬よ至り未全く融通行届兼候分の正金取交へ
上納不苦候事

〔詔書〕

同月八日

詔體太乙而登位膺景命以改元洵聖代之典型而萬世之標準

也朕雖否德幸賴祖宗之靈祇承鴻緒躬親萬機之政乃改元欲
與海內億兆更始一新其改慶應四年為明治元年自今以後革
易舊制一世一元以為永式主者施行

〔太政官〕御布告 九月八日

今般御即位御大禮被為濟先例の通被為改年號候就ては是
迄吉凶の象兆も隨ひ屢改號有之候得共自今御一代一號も
被定候依之改慶應四年可為明治元年旨被仰出候事

〔行政官〕御達 同日

今度提灯印御規定も相成候間為心得相達候事
但御東幸御日間無之儀も付諸官銘々急速も取調可被申

候事

〔太政官〕御布告 同月十日

近來猥も本領安堵抔と偽り元采地百姓共へ用金出來等申
付金穀を掠取候族も有之趣以の外の事も候向後右様の者
於有之の屹度御沙汰も可被及事
別紙の通御沙汰候間尙又精々取締本領安堵の姓名差廻候
迄金穀渡方一切不相成候事

〔驛遞司〕御布告 同月十二日

一驛遞の法則も都て驛遞司もて確定し府藩縣其法則を守
り遠近諸道一般も取締可致事

一 驛郷組替の儀ハ驛遞司ニ於テ取調其驛支配の府藩縣へ
 達シ府藩縣ニテ請取調印等可申付事
 一 驛々附屬村々内他支配人雜居候共其驛支配の府藩縣ニ
 テ一手ニ取調可申事
 一 驛郷の者共訴訟并願の儀ハ其驛支配の府藩縣ニ於テ可
 致處置萬一見込難付節ハ其支配より添番を以テ驛遞司
 へ可申立事
 一 驛郷の儀ニ付驛遞司へ喚立候節ハ其者支配の府藩縣へ
 相掛り喚立可申萬一至急の儀ニテ直ニ喚立候節ハ其旨
 支配へ前後ニ相達可申事

一 驛々廢置道替等を初往來ニ關係致候事件ハ都テ驛遞司
 へ相達取計可申事
 附出 火出水並道中筋異變有之往來ニ差支候節ハ驛々
 傳馬所取締役より逐一驛遞司へ可届出事
 一 驛遞司ニ御布告 九月十二日
 助郷ハ天下の公課ニ候處私役等を以テ種々申立候村邑も有
 之右の奉對天朝恐入候次第ニ候然る處領主支配添書相認
 爲致三歎願候向も有之心得違の事ニ候尤難澁の村々ハ甲乙
 御取調の上減役除免等可被仰付旨御布告も有之候得共即
 今一同ニ申立てハ御組替の妨礙も相成自然御法則相立

兼諸道一般の難澁（こまり）も立至り候儀大小緩急の次第深く相辨（わきま）
 へ假令領分支配の内難澁の村已有之候共追て御取調も相
 成候迄他村並の郷役相勤候様於府藩縣相應の手當致し置
 眼前諸道の難澁相救御用辨致し候様一同承知共々盡力可
 有之候事
 助郷組替相濟候分追々宿方支配の府藩縣へ御委任可相成
 候間支配違よ不拘人馬觸當次第速よ差出し都て其宿々の
 指揮を受候様可致郷方支配府藩縣も於ても得其意配下へ
 常々爲中間不都合無之様可致候事
 〔行政官〕御達
 九月十四日

來る六日
 崇徳帝神靈白峯宮へ飛鳥井町御遷還被爲在候間爲心得相
 達候事
 〔同〕官御沙汰 同日
 征討諸軍
 東北征討の諸軍勇進長驅已も賊巢も逼り捷報日も至り
 敵感不斜候然所邊陲の地追々寒天も赴き風雪慘苦も可至
 哉と深く被爲痛聖念候も付格別の思召を以て聊爲二防塞一毛
 布一着宛賜之候事
 〔同〕官御達 同月

今般但馬國生野銀山爲點檢近々佛蘭西人同道御用役々出張候條兼て御交際の趣も有之候間通行の路次府縣并藩領共末々至迄不法の儀無之様相達置可申事

〔行政官〕御達 九月十四日

一今般御東幸又付て兼て御布令の通御道筋宿驛迷惑不致様精々心を用ひ官家の舊習權威箇間敷儀決して不相成事又候若右等の振合於有之ハ嚴重御取糺又相成當人の勿論其主人の越度も可被仰付候間此段末々迄屹度可申聞事

〔同 官〕御達 同日

一今般御東幸又付供奉の面々旅籠并人足賃等拂方の儀銘々へ切手相渡置總て御後出立の出納司より惣勘定可相成候得共明後十六日出立の出納司より凡積を以て預め御下渡又相成候間御道筋宿々へ其向々府藩縣より支配役人一人宛出張致し居請取可申事

〔驛遞司〕御布告 同日

是迄宿助郷共風儀不宜多人數通行の節ハ混雜中人足共竊又其身を隠し或ハ請負の者空名の顔付致し置自然傳馬所の破れを相待居候て格外の賃錢を貪り傳馬所下役共又於ても前後其機又乘じ種々不正相倒さ候條僅の私欲を以通

行を妨げ宿郷莫大の費を相懸候段不埒至極も候今度行幸
 の儀ハ下民の塗炭御綏撫被爲遊度至尊自ら御出輦被爲
 遊候儀千歳未曾有の御盛舉難有奉拜戴皇國の民たる者争
 て御用可相勤答も候得共萬一右體心得違の者有之候者見
 付次第當人の勿論所役人付添の者も至る迄無用捨嚴重可
 申付事

〔驛遞司〕御布告 九月十四日

御東幸沿道諸藩へ先般相達候東海道助郷一宿凡七萬石附
 属可被仰付答候所御多端の折柄未だ御組立不相成宿々も
 有之今般御東幸被仰出候付ては是迄疲弊の定助郷而已

てハ必至難澁の趣相聞へ候得共右ハ不日新助郷御組立出
 來次第御布告の通五月己來の分共宿郷平等も割勤め埋可
 被仰付候條其旨相心得一同申合御繼立無滞盡力可致候尤
 是迄取來候割錢の儀も自今宿郷一體の譯も付てハ別段宿
 方へ受取候も不及札賃錢不殘出人馬へ相渡候様此亦相心
 得可申事

〔太政官〕御布告 同月十五日

此度御東幸も付てハ諸藩公議人の内一國一人宛海陸勝手
 次第御着輦前後東京へ可罷越旨被仰出候事
 但右差越候人体の儀も付御用有之候間公議人一同來る

廿五日己刻飛鳥井家へ出頭可致事

〔太政官〕御布告 九月十六日

大學校御取建被遊天下の人才を集文武共盛又被爲備度思
 食又候所方今御多端の折柄未だ御取調も行届兼候間先假
 又九條家を皇學所又梶井宮を漢學所又被用候旨被仰出候
 就ての兼て御布令の通先宮堂上及非藏人諸官人等望又隨
 入學可致候就定三十未滿小番被免の輩の成丈勤學致候様
 可心掛旨被仰出候事
 但皇學所學則開講等追て被仰出候漢學所來十八日開講
 被仰出候間辰刻集會可有之事

規則

一 國體を辨じ名分を正すべき事
 一 漢土西洋の學の共皇道の羽翼たる事
 但中世以來武門大權を執り名分取違候者許多又付向
 後急度可心得事
 一 虛文空論を禁じ着實又修行し文武一致又教諭可致事
 一 皇學漢學共又互又是非を争ひ固我の偏執不可有之事
 一 入學の八歳より三十歳迄又被定候事
 〔同 官〕御布告 同月十八日
 神佛混淆不致様先達て御布令有之候得共破佛の御主意も